

— ヨコハマの子ども・若者の成長を応援する人たちへ —

青少年育成活動・支援活動 研究報告・事例集

YOKOHAMA EYE'S 2015

— ヨコハマ アイズ —

青少年育成活動・支援活動 研究報告・事例集

YOKOHAMA EYE'S 2015

平成28年3月 発行

■編集・発行

公益財団法人 よこはまユース

〒231-8454 横浜市中区住吉町4-42-1 関内ホール地下1階

TEL: 045-662-3716 FAX: 045-664-6254

Mail: soumu@yokohama-youth.jp

URL: <http://www.yokohama-youth.jp/>



公益財団法人 よこはまユース

はじめに

平成14年(2002年)の開館からよこはまユースが運営をしてきた横浜市青少年交流センター(愛称：ふりーふらっと野毛山)が、平成28年(2016年)3月末をもって閉館となりました。「誰もが自由にふらっと立ち寄ることができ、年齢や環境などの背景を超えた『フラット(flat)な関係性』をつくることのできる居場所になるように」という願いが込められた愛称の通り、延べ200万人もの青少年たちが、学校や年代を超えた出会いやさまざまな体験などを通じて“大人になる助走期間”を交流センターで過ごしました。

開館以来、不登校・ひきこもり支援、子どもの貧困対策など青少年施策の変化、学校や近隣施設との連携の高まり、他の居場所とのネットワークなど、交流センターにおける「居場所」としての役割は、青少年を取り巻く社会背景や日々来館する青少年の変化に合わせ、そのかたちを変えてきました。

今年度の「YOKOHAMA EYE'S」は、14年間にわたる青少年交流センターの運営を踏まえ、居場所とは何か、その役割は時代とともにどのように変化してきたのかを振り返ります。また、横浜市内のさまざまな青少年支援活動や施設を調査し「居場所のいま」について検証したほか、青少年に関わる職員の能力や養成方法、居場所の方向性について考察するなど、未来に向けた「居場所の次の一歩」を考えた特集となっております。

今後も本誌の編集・発行を通じて、地域の青少年活動を“掘り起こす”“情報を蓄積する・発信する”“活動をつなげていく”といった機能を充実させ、よこはまユースは、地域とともに青少年の成長に寄与してまいります。

皆様のご支援、ご指導をいただきますよう、お願い申し上げます

平成28年3月
公益財団法人よこはまユース
代表理事 三田 修

YOKOHAMA EYE'S 2015

目 次

テーマ 「居場所」から社会へ—新たな青少年施策の方向性を探る—

第1部 横浜市青少年交流センターの14年間をふりかえる

- (1) 横浜市青少年交流センター(ふりーふらっと野毛山)年表 2
- (2) 【調査・報告】青少年たちにとっての「ふりーふらっと野毛山」とは
—かつての利用者、ボランティアとともに振り返る— 4
- (3) 【インタビュー】横浜市青少年交流センターの14年間をふりかえる 10

第2部 青少年の居場所の“いま”

平野 嘉昭……………18

第3部 これからの青少年施策を考える

【特別寄稿】

- (1) 子どもの居場所の原点とその変容をめぐって

駒澤大学教授 萩原 建次郎……………26

【特別寄稿】

- (2) 求められる青少年施設職員の力量

公益財団法人京都市ユースサービス協会常務理事 水野 篤夫……………30

- (3) 新たな青少年の拠点をめざして—「青少年交流・活動支援スペース」の概要—

34

第4部 事業報告

野島クリスマスキャンプ 20年のあゆみ

吉田 智之……………38

第1部 横浜市青少年交流センターの14年間をふりかえる

(1) 横浜市青少年交流センター(ふりーふらっと野毛山)年表

(2) 【調査・報告】青少年たちにとっての「ふりーふらっと野毛山」とは
ーかつての利用者、ボランティアとともに振り返るー

(3) 【インタビュー】横浜市青少年交流センターの14年間をふりかえる

(1) 横浜市青少年交流センター(ふりーふらっと野毛山)年表

年度	主な出来事・事業	世の中の動き
平成13年度 (2001年)	・ 3月 勤労青少年センター(Do館)を10月から休館し、施設のあり方を検討することを決定(市) ・ 6月～9月 勤労青少年センター検討委員会を設置し、施設のあり方等について検討(市) ・ 10月 勤労青少年センター休館	◆小泉内閣発足
平成14年度 (2002年) 14,268人	・ 9月 勤労青少年センター廃止、青少年交流センター設置について、横浜市青少年施設条例を一部改正 ・ 10月～11月 施設改修・補修工事实施 青少年交流センター開設準備担当課設置(法人内)開設準備スタッフが、京都市南青少年活動センター、杉並区立児童青少年センター「ゆう杉並」を視察 ・ 12月 横浜市青少年交流センター開館	◆多摩川にアゴヒゲアザラシのタマちゃん出現 ◆小柴昌俊がノーベル物理学賞受賞 ◆田中耕一がノーベル化学賞受賞
平成15年度 (2003年) 111,841人	・ 6月 第1回「@楽祭」実施 ・ 8月 夏期ボラ活動開始(86人) ・ 10月 第1期青少年委員会発足 ・ 11月 愛称「ふりーふらっと野毛山」に決定 ・ 3月 老松中学校卒業生企画「フットサル大会」実施	◆オレオレ詐欺が横行 ◆小惑星探査機「はやぶさ」打ち上げ
平成16年度 (2004年) 117,353人	・ 7月 第1回青少年ライブ ・ 10月 青少年委員、「ゆう杉並」を見学 中高生委員との交流会 ・ 11月 スタッフ研修(川崎市子ども夢パーク/フリースペースえん見学) ・ 2月 管理運営団体(社)横浜ボランティア協会と(財)横浜市青少年科学普及協会が統合 (財)横浜市青少年育成協会発足	◆新潟県中越地震 ◆アテネ五輪 ◆ニンテンドーDS流行
平成17年度 (2005年) 141,246人	・ 4月 コーディネーターが企画運営する「ふらっとCAFÉ」開始 ・ 11月 利用料金制度スタート(青少年の利用は一部無料) ・ 2月 「居場所フォーラム2005」全国から“青少年の居場所づくり”に携わる人たちが参集	◆日本プロ野球セ・パ交流戦が開幕 ◆JR福知山線脱線事故
平成18年度 (2006年) 153,422人	・ 4月 青少年体験活動推進センター設置 ・ 6月 ワークルーム閉鎖(一部青少年の目に余る行為により) ・ 7月 ワークルーム再開(青少年とスタッフが一緒に作ったテーブルやいすを並べて) 利用者数累計50万人突破	◆第1回ワールド・ベースボール・クラシックが開幕 ◆2006 FIFAワールドカップ開催
平成19年度 (2007年) 161,937人	・ 5月 第5期青少年委員会発足(過去最高20人が活動) ・ 8月 山梨県道志村での「高校生水源林ボランティア」を市水道局と協働でスタート ・ 9月 社会教育主事課程の実習生受け入れ開始 ・ 11月 青少年のためのHIVエイズ予防のための勉強会実施。ポリビアの高校生とエイズ予防についてテレビ会議(JICA横浜にて) ・ 12月 学齢期児童に対する職業観の醸成のための「THE☆お仕事ゲーム」実施(よこはま若者サポートステーションと共催)	◆第1回東京マラソン開催 ◆iPod touch(アップル) ◆ビリーズブートキャンプ
平成20年度 (2008年) 160,801人	・ 4月 ロビーワークの手法や「交流」の意味を参考・再検討し、職員体制を6人から3人へ ・ 7月 大学生の夏期インターンシップ受け入れ開始(子どもたちとの交流だけでなく事業・夏期ボラのサポートにも大活躍)	◆北京オリンピック開幕

	・12月 センターを利用する青少年が企画「遊戯王カード大会」(21人参加)人気イベントのため08年度以降毎年開催 ・10月 「交流センター5周年記念誌」発行	
平成21年度 (2009年) 170,085人	・6月 「横国大キャリアカフェ」横浜国立大学の学生が大学生活や受験勉強について高校生にアドバイス(12月と1月にも実施) ・10月 より利用しやすい施設を目指して、利用料金の当日支払いを可能に	◆裁判員制度による初の裁判が始まる ◆マイケル・ジャクソン死去
平成22年度 (2010年) 157,270人	・3月11日 東日本大震災発生 施設に被害はなかったものの、余震被害なども考慮して3月末まで休館 利用者数累計100万人突破	◆小惑星探査機「はやぶさ」が地球に帰還 ◆東日本大震災発生
平成23年度 (2011年) 145,002人	・4月 (財)横浜市青少年育成協会から「(公財)よこはまユース」へ新たなスタッフでスタート ・5月 新体制で1か月を迎え、子どもたちとの向き合い方に戸惑いを覚える ・9月 コーディネーター研修 ・1月 「青少年の地域活動拠点連絡会」 市内8か所ある青少年の地域活動拠点スタッフが顔の見える関係づくりを目指す	◆2011 FIFA女子ワールドカップドイツ大会で、サッカー日本女子代表が初優勝 ◆TV「家政婦のミタ」
平成24年度 (2012年) 146,443人	・4月 学習支援事業「学習マイプラン」をボランティアと協働で開始 無料の勉強会を週1回行う ・3月 交流センター10周年記念式典 「交流センター10周年記念誌」発行 ・9月 ヨコハマアートサイト「動物園劇場」	◆東京スカイツリーが開業 ◆山中伸弥氏がノーベル生理学・医学賞を受賞。
平成25年度 (2013年) 利用者数 150,403人	・4月 3階オープンスペースの活用 横浜市福祉サービス協会が転居したため、3階フロアを「青少年の表現活動の場」として活用。横浜トリエンナーレサポーターと協働事業を多数実施 ・10月 電気陶芸釜導入 よこはまユースの賛助会員のからの寄附金を活用して、青少年や青少年を支援する人のための陶芸教室実施 ・9月 老松中学校職業体験 老松中学校2年生の職業体験の受け入れを開始 ・10月 第11期青少年委員 南三陸へ 青少年委員がNPOワールドビジョンジャパン主催の「南三陸を学ぶ」に参加 実際に東日本大震災の被災地に足を運び、自分たちの故郷の復興に取り組む中高生と交流	◆長嶋茂雄と松井秀喜に対する国民栄誉賞授与式挙行 ◆TV「半沢直樹」
平成26年度 (2014年) 利用者数 146,813人	・5、9、2月 「青少年の居場所・地域活動拠点連絡会」を年3回実施。延べ133人が参加 ・8月 「ジョブカフェ」(動物園の仕事)を実施 ・1月 「横浜こども青少年に関わる活動関係者の大交流会」を実施。 ・2月 野毛山公園で傷害事件発生。利用者の安全を図るため、交流センターを2月20日から入館利用制限。関係機関・団体により「少年サポートチーム」発足 ・3月 24日入館・利用制限を解除し、フリースペースの利用および青少年の利用登録を再開する	◆ブラジルW杯開催 ◆富岡製糸場が世界文化遺産に登録 ◆川崎市で中1男子殺害事件
平成27年度 (2015年) 利用者数 137,791人	・4月 施設の耐震上の理由での閉館に伴い、市と協働して利用者説明会を実施 ・5月 閉館に伴う代替策に関して利用者ヒヤリングを実施 ・3月 閉館	◆マイナンバー制度がスタート

(2)【調査・報告】 青少年たちにとっての「ふりーふらっと野毛山」とは

― かつての利用者、ボランティアとともに振り返る ―

平成14年（2002年）12月の開館から13年4カ月。
この年に生まれた子どもは中学生になります。高校2年生だった子は
30歳を迎えます。子どもや青少年にとって14年という年月は、心身
ともに大きく成長するとともに、進学や就職などで自分も周りの環境も
大きく変化する時間です。

この14年間で、延べ200万人もの青少年がふりーふらっと野毛山
（以下、「センター」という。）の玄関をくぐりました。この項では、
少し大人になった彼らが、少し前を思い出しながら、センターを振り返ります。【調査／編集：七澤淳子】



彼らは、センターでどんな時間を過ごしていたのでしょうか。

まず、放課後の友だちとの遊び場として、センターではずっとゲームをしていても、おしゃべりしていても怒られないですからね。

部活動でクタクタに疲れた身体を休めに来たり、マジメにテスト勉強をしに来たり。覗けば誰かがいるセンターは、第2の学校だったのかもしれませんが。でも、ギターが弾けたりマンガに詳しくたり実は卓球が上手かったり、将来の夢に向かってコツコツと頑張っていたり。みんな、学校だけでは表現しきれない輝きを放っていました。

センターは、時に心と身体の“逃げ場所”になっていたようです。友だちと上手くいなくて「なんかつまらない」と閉館時間まで受付カウンターで過ごしたり、学校に居場所が見つけれなくて朝から来館したりする青少年もいました。

進学や就職で遠くに旅立つ時に、「いってきます」と立ち寄ってくれた青少年、自習室で毎日顔を合わせるうちに、お互い励まし合うかけがえのない仲間となった受験生たち。希望通りにいかなくて気持ちが折れそうになった時もありました。

イタズラ盛り、有り余るエネルギーのぶつけ

どころがなくて、センターの備品を壊した中学生。カバーをかけ直したあの椅子は、また、青少年たちの憩いの場になりました。

夏期青年ボランティア活動で、「自分が人の役に立って初めて実感できた」と言った高校生。看護師を目指すボランティア仲間と出会って、退職して学校に入り直した社会人。年下も年上もいる青少年委員会の委員長になって、「責任を持つってこういうことなんですね」と言った大学生。バラバラな意見をまとめるのは本当に難しかったですね。そして、様々な背景を持つ子どもと出会って、子どもを支援する仕事に就いた青年。今も頑張っているようです。

青少年たちは、様々な年代の様々な価値観を持つ人たちと出会いました。遊び場として、バンドやダンスの練習に、サークルの会議に、イベントの参加者として、ボランティアスタッフとして、そして青少年委員として。200万人の、200万通りの青春がセンターにありました。

彼らにとって、ふりーふらっと野毛山とはどんな場所だったのでしょうか。

【アンケート・ヒアリング結果】

—青少年たちにとっての「ふりーふらっと野毛山」—

ふりーふらっと野毛山は、「居場所づくり」をコンセプトとし、青少年が『大人になるための助走期間』を過ごす場所として、そして、様々な出会いや経験ができる空間として青少年とともに運営されてきました。大人が用意した「大人になるための助走期間」は、大人たちの予想をはるかに超えて、多くの出会いや経験を、青少年自身がもたらしてくれました。平成28年（2016年）3月の閉館にあたり、彼らが大人になった今、この「助走期間」を振り返ってもらいました。

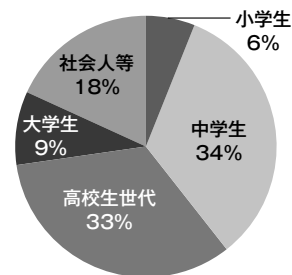
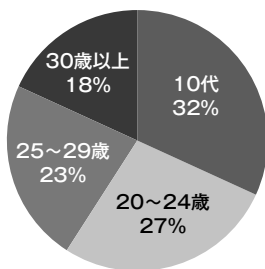
- 対象：平成14年～27年度中に、ふりーふらっと野毛山を利用またはボランティア等の活動をしていた人
- 調査期間：平成27年（2015年）12月～28年（2016年）3月
- 調査方法：往復はがき・Eメールによるアンケートおよび対面によるヒアリング
- 回答協力者：22人 *呼びかけ50人。転居等で連絡が取れない人が多くいました



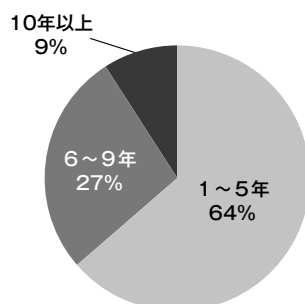
*延べ200万人もの青少年が来館した「ふりーふらっと野毛山」。

■協力してくれた皆さん

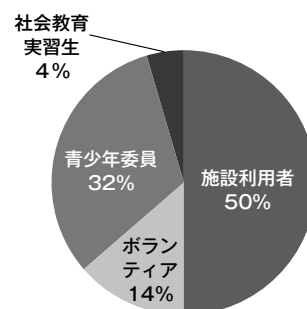
（1）現在の年齢（平成28年（2016年）1月現在） （2）主に利用していた時の学年（複数回答）



（3）利用（活動）していた年数



（4）主な関わり方（利用者、ボランティア等）



■私たちが「ふりーふらっと野毛山」を振り返りました

◎質問1：ふりーふらっと野毛山での体験や人との関わりなどを振り返って、
現在、役立っていることや力になったことがあれば教えてください。

◎質問2：それは、具体的に「(誰と)どのような場面で」感じられましたか？

◎自由記述欄(メッセージなど)

凡例：年齢／現在／ふりーふらっとを利用していた主な年代／関わり方 ＊内容は本人が記載したものによる

■Aさん(23歳／保育士／主に小学生～中学生時に利用／施設利用者)

小学生のころからの遊び場です。たくさんの人たちと関わることができました。特に異年齢の関わりが、私の中では大きかったように感じます。かつては地域で自然と異年齢同士の関わりが生まれていたと思いますが、今の時代ではなかなか交流できる場や機会は少なくなっているように思います。だからこそ、ふりふらという場は素敵な場所であったのだと実感しています。

職員といろいろな話をしたり、年上のお兄さんお姉さんに一緒に遊んでもらう中で、自然と仲良くなれました。そのような人たちの存在がありがたかったのだと感じています。

■Bさん(29歳／主婦／主に高校生～社会人時に利用／ボランティア、青少年委員)

私生活で嫌なことがあっても、センターに行けば職員やコーディネーターの方々、ボランティアつながりの人、青少年委員がいるということが心強く、知らず知らずのうちに居場所になっていたことが、力になっていたと思います。

ボランティアを始めた時よりも、青少年委員をやっていた時の方が人とのつながりを感じました。

青少年委員会で、みんなでワイワイガヤガヤしながら行事をすすめたり、広報誌の記事を居残りで作りながら、職員の方々やコーディネーターさんと関係のない話をしていた時のような、何気ない時間が当てはまると思います。

今まで、センターのありがたみを考えたことはありませんでしたが、このアンケートを機に「質問1」のとおり居場所になっていたのだと気づきました。センターがなかったら…センターとつながりがなかったら…どうなっていたか想像ができません。この場を借りて、お世話になった方々、ありがとうございました。

■Cさん(24歳／会社員／主に中学生～社会人時に利用／施設利用者)

人にやさしくなった。

職員の一人ひとりの声掛けや対応により、やさしくなれた。

■Dさん(24歳／接客業／主に高校生～社会人時に利用／施設利用者、ボランティア)

友だちの作り方や人との関わり方など、ふりふらに来る前より少しずつわかってきました。ボランティアをすることで、自分に少しずつ自信が持てるようになりました。

スタッフや職員さん、友人などなど、心が安らいだり自分の居場所があると思いました。

■Eさん(19歳／学生／主に高校生時に利用／施設利用者)

公共の場を使っている、という意識が芽生えた。

部屋を予約するとき、たくさんのルールがあって、部屋を余分に取りすぎたらどうなるか、他人とはいえ、他の団体の方々のこと考えなければならないことを学んだ。

■Fさん(23歳／会社員／主に高校生～大学生時に利用／ボランティア、青少年委員)

自分で企画から準備、運営、片付けまですべてに参画することのできるイベントの経験が、社会人生活で予算やプロセスをある程度予測して行動する力になっています。また、様々な年代や個性を持つ人々と話すことで得た「コミュニケーション能力」が接客や友人関係で役に立っています。

接客業をしています。新入社員の企画コンペでイベントを企画した際に、予算の見通しと成功させるために必要なプロセスまで細かく企画でき、少し手直ししたらすぐにも使える企画だと評価されました！

■Gさん(28歳／会社員／主に高校生時に利用／ボランティア、青少年委員)

立案・企画運営等、青少年(私たち)の意見を尊重し活動させていただいたおかげで、自分の意見を表現する企画力・立案力・実現力が身に付き、社会人になった今、その経験が活かされています。学校では、同年代で関わることが多い中、異年齢と交流することにより視野も広がりました。

- ・青少年委員メンバーとの定例会やイベントにおいて
- ・夏期ボラメンバーとともにひとつの目標に向かって作業に取り組むことによって

■Hさん(21歳／学生／主に高校生時に利用／施設利用者、ボランティア)

スタッフさんはじめとして、年上から年下の方まで関わったことで、同年代との関わりでは持てない、視野の広げ方ができました。

主にスタッフさんです。特に3月のライブのスタッフとして手伝わせていただいたのが大きな経験となっています。

■Iさん(29歳／音楽関係／主に中学生時に利用／施設利用者)

中学生時代にスタジオを利用させていただいたおかげで、今も音楽活動を続けることができています。その時に、音楽活動をともにしていた友人とは今でも仲良くお付き合いを続けています。

中学時代のバンドメンバーとスタジオ利用や交流センターでのイベントに参加させてもらえたことにより、ふりふらとは付き合いが深くなりました。今では、講師として「ドラム講習会」を開かせていただいています。

**■Jさん(31歳／会社員／主に高校生～社会人時に利用／ボランティア、青少年委員)**

ふりーふらっとでは、たくさんの人と出会い色々なことを経験させてもらいました。様々な考え方や年齢の人たちがいるので、その人たちとどうやって上手くやっていくか・コミュニケーションをとるかなどを学ぶことができました。その力は、社会に出て活用することができています。人前で話す機会にも恵まれていたので、プレゼンテーションや人に伝えることの良い勉強になりました。

ボランティア活動や青少年委員として活動している場面でよく感じるが多かったです。青少年委員では、子どもたちだけでなく職員さん、ボラさん、コーディネーターさん、利用者さん、保護者など、普段の生活だけでは関わることはない方々と接することができました。

ふりーふらっとは、私にとって家や家族であり、仲間であり、青春であり、居場所であり、自分らしくいられる大好きな場所です。場所が変わってもずっとそんな場所であってほしいです。

■Kさん(19歳／大学生／主に高校生時に利用／施設利用者)

放課後、学校で集まることができないメンバーが、集まれる場所を提供していただきました。

メンバー同士が仲良くなるのに役立ちました。文化祭や公演が成功し、ふりふらで準備ができて本当によかったと思えた場面です。

■Lさん(26歳／会社員／主に高校生時に利用／ボランティア)

年齢の違う人たちとともに活動することができ、自身の視点よりも高い位置から物事を考える良い機会となりました。自ら考え、消極的にならずに自身の意見を述べ、より良い企画を作り上げていく過程に携わることができ、学生生活だけでなく仕事でも力になっています。

ふりーふらっと時代に親交を深めた友人や出会った人々と企画を練ったことは、会社での意見交換やプレストの場面で自身の考えとして年上の方や他部署の方にも伝えていく力として役立っています。

貴重な体験の中から、自ら挑戦し、考えていくことの重要性を感じました。

■Mさん(28歳／公務員／主に高校生～大学生時に利用／施設利用者、青少年委員)

何の利害関係もなく悩みを相談したり遊ぶ相手がいてくれたりしたことが、かけがえのない体験でした。逆に学校だけではないコミュニティを知ったことで、世の中にいろいろな人がいることを学びました。自分もそのうちの一人でしかなく、他の人が自分をどう思っているか、気にしすぎないようになれました。

日々仕事をする中で、相手がどんなことを考えているのかと同じくらい、自分はどうしたいのか、ということを考えることができます。

他の人がたいして自分に興味を持っていない、ということを発見できたからだと思います。

センターのような「行けば誰かと関わることができる」施設というのは、とてもありがたい存在だと思います。そんな「装置」が市内にたくさん点在すれば、ヨコハマの街の魅力がもっと引き立つのだろうと信じています。

■Nさん(30歳／主婦／主に高校生～大学生時に利用／社会教育実習生)

他の場面でも世代を超えて、人と接することができました。

ボランティア活動先などの人との交流の場に身を置いたとき、自ら進んで話をするようになることができました。

「ふらっと来てもいいんだ」と心のよりどころの場所がいつもあってほしいです。

■Oさん(32歳／アルバイト・コミュニティ主宰／主に社会人時に利用／ボランティア)

現在、団体を立ち上げて運営していることや、イベントへの参加をはじめたくさんの友人や仲間ができたこと、視野が広がったこと。

ライブや「こどもの日まつり」などのイベントを通じ感じられました。

■Pさん(30歳／求職中／主に高校生～社会人時に利用／青少年委員)

青少年委員になり、職員や委員会メンバーと交流が深まり、信頼関係ができてくると責任感を感じるようになりました。以前は、少し体調が悪ければ予定をキャンセルしてしまうこともありましたが、自分が休むことで委員の仕事が遅れたり、メンバーに迷惑をかけてしまうかと思うと、少し休んでからでも行こうと思うようになりました。

また、自分がいてもいなくてもあまり影響はないと思っていましたが、交流センターに行けば職員の方々が温かく迎えてくださり、委員メンバーと仕事をしていくうちに、私のことを良く見ていることが分かるようになりました。適当な対応ではなく、私を見てくれる方が失望しないような行動を取ろうと心がけるようになりました。

■Rさん(28歳／保育士／主に高校生～大学生時に利用／ボランティア)

はじめて夏期ボラをやった時、学校の課題の為にボランティアをすることはどうなのか、モヤモヤしていました。職員に「参加して何か得られれば、何がきっかけでもいいんじゃない」と言っただき、だいぶ気持ちが晴れました。それからは色々なボランティアに挑戦することができました。

高1の時の夏期ボラで関わった3人姉弟が、お姉ちゃんがまだ小学校低学年なのに、弟1人を手をつないで、もう1人をベビーカーに乗せて来たので「弟たちを見ているから遊んでおいで」と声をかけたのに、弟たちが泣いてしまい「私じゃないとダメなんだ」と言ってお姉ちゃんがすぐに戻ってくることがありました。こんな小さい子どもを遊ばせてあげることができなかった自分と、弟たちくらいあやせると思っていたのに、何もできなかった自分が悔しくて、保育の勉強をして資格を取り、巡り巡って今の仕事をしています。

一筋縄ではなかなかいかないのが保育ですが、本当に貴重な経験をさせてもらったと思っています。

センターは「小さな社会」だと言ったスタッフがいいます。子どもから大人まで、様々な人が集まるセンターは、まさに小さな社会でした。大人と子どもの距離が近く、支え合いが自然に行われてきた地域の営みが難しくなってきた頃、「居場所づくり」という言葉が聞こえてきました。センターは、誰にでも開かれ、少しスタッフが間に入ることで出会いや交流ができた場でした。たくさんの方がいるけれど自分だけの使い方があって、仲間がいて、行くことを強要されなくて、でも待っている人がいるかもしれない、と思える場でした。

「居場所づくり」には“青少年の成長をはかる”という目的がセットになっています。しかし、成長したかどうかなど、誰もよく分からないのが本音です。できることが増えた、以前と比べて考え方が変わったなど、「変化」を実感した時にはじめて「成長できた」「視野が広がった」などと感じることができるでしょう。

また、「このアンケートを機に、センターが居場所だったんだと気付いた」と言った青少年がいました。子育て中の彼女は、きっと「多くの人と出会う経験が人生のプラスになる」という価値観を持ち、子どものチャレンジを後押しするようになるかもしれません。興味深かったのが、様々な人たちと関わった経験を振り返ってくれた2人です。1人は、「他の人がたいして自分に興味を持っていないことが分かったから、他人が自分をどう思っているのか気にしすぎないように

なれた」。そしてもう1人は、「私のことをよく見てくれている人がいることが分かったから、その人たちを失望させないように頑張るようになった」。一見、相反しているように見えますが、この2人とも、人との出会いや関わりの中で“人に対する”気持ちや考え方が変化したことが伺えます。

「自分の意見を言ったり、仲間の意見をまとめたりしたことが役立っている」と、現在の仕事と照らし合わせて振り返った青少年もたくさんいました。また、ほんの数時間の体験が、将来の進路につながるきっかけになったり、部屋の取り方から社会性を学んだりなど、P5の冒頭で書いたように、彼らは大人たちの予想をはるかに超えたところで、自分たちで成長していったのでしょう。

成果をはかることは難しいですが、私たちスタッフは、この経験がいつか成長につながるように、という願いを込めて日々青少年たちと向き合ってきました。

今回のアンケートは、本当にごく一部の青少年の声しか聴けていません。この振り返りで、センターを総括することはできませんが、この「いつか」を信じた14年間の、小さな成果が見えた気がします。

最後に、忙しい中協力してくれた22人の皆さんにお礼申し上げますとともに、センターに足を運んでくれたすべての青少年たちに感謝します。

いつかどこかで、「あの頃」を一緒に語り合える日がくることを楽しみにしています。

(3)【インタビュー】横浜市青少年交流センターの14年をふりかえる

平成14年（2002年）に開館した横浜市青少年交流センター（以下、「交流センター」とする）が、平成27年3月末をもって、耐震上の理由で閉館することになりました。

近隣の小中学生、市内の高校生、大学生をはじめ、多様な世代の人びとが、それぞれの目的で集まり、出会い、交流する場として、地域の青少年を育ててきた交流センター。その“始まり”と“終わり”に立ち会い、交流センターの職員として、施設とそこで出会った青少年を見守ってきた2人の職員のインタビューを通じて、交流センターの14年をふりかえます。

【インタビュー／構成：尾崎万里奈】

自分が存在していることを感じられる、ありのままの「居場所」



富岡 克之（横浜市青少年交流センター センター長）

交流センター開館当時の職員のひとり。約10年ぶりに施設長として交流センターに戻ることにになり、施設の閉館にも立ち会うことになった。

●何もないけど、「何をしてもいいところ」

ー交流センターで働くことについて、最初はどう思いましたか？

富岡*最初は何をしていいのか、さっぱり分からなかったです(笑)交流センターが開館した当時は、「居場所」なんていうものは一般的には知られていなくて、「青少年の居場所づくり」と言われても、「ピン」ときませんでした。そもそも、「居場所」は自分で見つけるものだと思っていたし、大人に用意された「居場所」に子どもたちが来てくれるのかな？という半信半疑のスタートでした。

ー「青少年の居場所づくり」という考えが、まだ社会的には知られていない時期にスタートしたのですね。

富岡*子どもたちにとってもよく分からない場所だったと思います。最初の1か月くらい、中高生は素通りでしたね。近くの図書館の自習スペースが混み合っているときに、スタッフが「あそこにも自習できる場所があるよ」って紹介してくれて、ちらほら浪人生が来てくれるようになったのが、最初の利用者でした。冬休み前になって、はじめて近隣の中学生の女の子たちが、

少しずつ顔を見せるようになってきた。

ー中高生は、何をきっかけに交流センターに来るようになったのでしょうか？

富岡*はじめは、「ここは、なに?」、「何をするとこなの?」という感じで、センターを覗きにきました。彼女たちに、思わず、「何をしてもいいところだよ!」と答えたものの、「なんにもないじゃん!」と突っ込まれるくらい、まだ“まっさら”な施設でした(笑)何もないと言いながらも、その子たちがふらっと立ち寄ってくれるようになったことが、中高生が交流センターに来るようになったきっかけですね。

●何気ない声かけから、関係性が生まれる

ーその子たちは何を目的に来ていたのですか？

富岡*基本は友達と一緒に来て、仲間内で遊ぶことがメインなのですが、時折、受付のカウンターにふらっとやってきて、スタッフを相手におしゃべりしていく時間も増えていきました。いま思えば、こうした何気ない「おしゃべり」を通して、徐々に子どもとの関係ができてきた。子どもにとっても、(スタッフと関係性が築けて)その空間が「居心地がよい」と思えるようになると、ソファでドラ

ダラしたり、仲間同士でおしゃべりして自分たちの時間を楽しみながらも、スタッフや仲間以外の子どもなど、「人と絡める場」になっていきました。

—中学生は「遊べる場所」よりも「居心地の良い場所」を求めているのかもしれませんがね。小学生はどんなきっかけで遊びに来るようになりましたか？

富岡*きっかけは近くの小学生が、授業の一環で交流センターの見学に来てくれたことです。子どもたちに「自由に遊びにきていい場所だよ」と伝えたその日の放課後から、小学生がわんさか遊びに来るようになりました(笑)ファミコンを置いていたので、みんな夢中になっていました。

—ひと口に「青少年」といっても、年齢によって求めるものは違うということですね。

富岡*小学生は決まった目的がない場所にわざわざ来ないですし、自分で目的を見つけることもまだ難しい年頃。「遊び場」になるように、場所を整備してあげることが必要だと思います。中学生は、うるさいことを言わずに関係性を築くことが大事。高校生になると、バンド練習など目的をもって施設にくるようになります。そのつながりをきっかけに、その人自身がやってみたいことを実現する場になるように、うまく働きかけてあげることが大切だと思います。浪人生も、最初は勉強目的で来ていたのが、だんだんスタッフと仲良くなって、ボランティア活動に参加するようになることもある。何気ない「声のかけ方」ひとつで、その後の関わり方や関係性が変わっていくところが、交流センターで子どもと関わることの面白さですね。

●「誰か」に必要とされることで、子どもも大人も変わってゆく

—色々な年代の子どもが集まる交流センターでは、年代に応じた場づくりや一人ひとりとの関係性づくりなど、職員に求められることも幅広いですね。

富岡*そうですね。年代も背景も違う子どもたちが集まる施設を運営していく上で、いま思えば、交流センターを利用する“大人”の存在は、とても大き

かったと思います。最初は、子どもだけの施設にしたいという思いもありました(笑)でも、交流センターは大人も利用できる施設としてスタートしましたから、大人の利用者を「お客さん」扱いせずに、一緒に子どもを見守り、育てる「協力者」になってもらおうと、働きかけていきました。子どもも大人も一緒に参加できる成果発表会を行ったり、団体の活動に子どもたちを参加させてもらったり…。和太鼓の練習をしている団体が、施設のイベントで中学生と一緒にやったのをきっかけに、中学校まで和太鼓を教えに行ったこともありました。子どもと実際に関わることで、大人の意識も変わっていきました。

—大人も利用できる施設だからこそ生まれた関わりですね。職員だけでなく、子どもを見守ってくれる大人が周りにいることは心強いです。

富岡*変化したのは利用者の意識だけではなくたですね。職員自身も、子どもとの関わりを通して変わっていきました。例えば、僕と同期で配属されたAさんは、もともと子どもと遊んだりすることは苦手とするタイプで、事務所からロビーに出ていく回数もあまり多くはありませんでした。でも、施設に遊びに来る子どもたちに名前を覚えられて、「Aちゃん、あそぼ〜！」って声をかけられるようになって、徐々に積極的に子どもに関わるようになっていきました。職員でも、大人でも、子どもと関わり、必要とされる中で変化していく姿を見て、「誰かに必要とされる」という経験が、子どもも大人も成長させることを感じました。ボランティア活動にも、同じことが言えますよね。交流センターは子どもだけが成長する場ではなくて、子どもと大人がお互いに育ち合う場なのかもしれません。

●10年後の成長した姿に出会える喜び

—子どもも大人も、人との出会いや交流を通して成長する、ということですね。子どもとの関わりの中で、やりがいを感じるのはどんな時でしたか？

富岡*職員として10年前に交流センターで働いて

いた時は、子どもと関係性ができて、頼りにしてもらえることが嬉しかったですね。いまは、当時来館していた子どもたちに、「あの時は楽しかったね」とか、「交流センターがあって良かった」、「“ふりふら”は青春の1ページ」と言ってもらえること。利用者だった子が、社会人になって施設を訪ねてきてくれることもあって、大人の視点で交流センターのような場所の必要性や意義みたいなものを感じて、理解してくれることも、すごく嬉しいですね。交流センターのような取り組みは、成果が見えにくい部分も多くて、塾に通って学力が上がる、というような分かりやすい成果は、なかなか出てきません。職員として働いていた当時の施設長に、「5年、10年経った時に、その人がどう成長しているのかが自分たちの仕事の成果だ」と言われたことがあって、いまになってその意味が分かった気がします。

一交流センターでの子どもとの関わりで、一番嬉しかったのは、どんなことですか？

富岡*そうですね。交流センターの立ち上げから2年経って、僕が別の部署に異動になる時に、いつも遊びに来てくれた子どもたちが送り出してくれたことや、異動先の施設に彼らが遊びにきてくれたことは、忘れられない思い出ですね。面倒くさい思いをたくさんしながら関わってきた子たちだったので、本当に嬉しかったです。でも、子どもとの関わりは一人ひとり違うから、その子自身が一步でも前に進んだこと、変化したことは、それぞれがかけがえのないことだと思います。一人ひとりの成長に向き合える、という意味では、交流センターでの子どもとの関わりは「学校っぽい」部分があるのかもしれないですね。

●学校的、でも学校とは違う価値観の場所

一「学校っぽい部分」というのは具体的にはどんな部分ですか？

富岡*うまく言えないですが、学校の延長にある「放課後」の雰囲気というか、似たような文化が

交流センターにはあったような気がします。ヤンキーっぽい子も来るけど、どちらかというと学校文化に馴染む子がよく来ていたような印象があります。その一方で、矛盾するようですが、職員は「ここは“学校”とは違う」という意識を持っていて、「“学校”は評価される場だけど、交流センターはそうではない」という感覚を持っていたように思います。評価されることはないけど、自分の責任の中で行動することが求められる場所というか…。

一学校に似ているけど、学校とは違う価値観の場所、ということでしょうか。

富岡*学校って、ある意味では特殊な場所だと思うんです。やらなきゃいけないことや、守べきルールがたくさんあって、「おつとめ」みたいな感覚を持っている子どももいる。先生と生徒や生徒同士も、気が合わなくても無関係でいることが難しい場所です。それに比べると、交流センターは「任意」の場所と言えるのかも。職員でも他の利用者でも、気が合わない人とは一定の距離を置くこともできるし、子どもの側から声をかける大人を選ぶことができます。「〇〇さん、今日いる？」と尋ねて、居なければ帰ってもいい。相手を選んで甘えたり、自己表現したり、子どもの側から選べる自由があるのが交流センターの良さなのかも。その分、子どもとの関わり方については、職員の中でコンセンサスを得ることがとても難しかったですね(笑)決まった正解がない中で、職員の間でも色々な考え方がぶつかり合うことも多い。それは10年前も今も変わらないですね。

●子どもに向き合う意識の変化

一10年前と比べて、変化を感じる部分はありますか？

富岡*10年前もいまも、子どもの質は変わってないと思います。人懐っこさや、褒められると照れ臭い感じとか、すぐに「うざい」とか言う中学生なりの自己表現の仕方も変わってない(笑)どちらかというと、大人が子どもを見る目が変わったのかもしれないですね。10年前に交流センターにいた時は、

目の前の子どもとの関わりが一番大事で、「親切なおせっかい」が合言葉でした。子どもの「居場所」として、学校や家庭とは一定の距離感をもつ、という意識があって、交流センターで何かやらかした場合にも、「学校には言わない」という暗黙の了解がありました。

ーいまはどんな意識で子どもに向き合っていますか？

富岡*いまは、目の前の子どもの「背景」を考えてしまう自分がいます。以前は「しょうがない奴らだな」だったのが、いまは「こいつら何かあるのかな？」に変わった。立場の違いや経験もありますが、子どもを取り巻く状況をより広い視点で見ることを意識するようになりました。交流センターで職員がキャッチした気になる子どもの情報について、学校とも連携して対応しますし、家庭環境を考えざるを得ないケースも増えてきました。社会の変化に応じて、職員の対応も変化してきたと感じます。10年前に来ていた子どもの中には、いま思えば「ネグレクト」に近いような家庭環境の子どももいましたが、当時はいまのような問題意識を持っていませんでした。

ー子どもは変わっていないけれど、子どもが育つ環境や社会の問題意識が変化した、ということですね。

富岡*そうですね。センターの事業としても、4年前から学習支援事業をスタートしていて、「居場所づくり」を土台にしながらも、課題に対応する「支援」の場としての役割も大きくなっていると感じます。その一方で、課題を抱えている子どもに対して、「かわいそう」という目で見ていると、子どもは敏感に感じとる。特別視して優しくしすぎると、その「配慮」を感じ取って傷ついたり、荒れる子どももいる。「ダメなものはダメ」というスタンスも大切ではないかと思っています。

●自分が存在していることを感じられる場所

ー誰でも来ることができる場だからこそ、色々な背景の子どもが集まってくるのかもしれませんが。

富岡*近隣の地域の大人の中には、交流センター

に対して「ワルのたまり場」といったマイナスのイメージを持っている人もいます。実際に、家庭にも学校にも地域にも居場所がない子どもたちが集まって、“やんちゃ”している時もある。でも、そういう子どもも含めて、子どもにとっては、地域の身近な遊び場であり、「居場所」になっているのが交流センターなんです。大人になった子どもたちに、「あそこがあったから、今の自分がある」と言ってもらえる背景には、年代も対象も関係なく、どんな子どもも受け入れるという職員の姿勢があったからこそだと思います。

ー最後に、これから先、子どもたちに必要な場所はどんな場所だと思いますか？

富岡*交流センターは今年度で閉館することになりますが、これからも交流センターのような場所が子どもたちには必要だと思います。一言でいうと、「気軽に立ち寄ることができて、ありのままの自分でいられる場所」。そこで何をするのか？自分が何をしたいのか？は、まずその場所に行ってから考えればいい。その場所で、多様な大人と出会い、関わり合うなかで、世の中には色々な人がいて、それでいいんだってことが分かればいいと思うんです。そして、身近な地域に「居場所」がない子どもにとっては、地域を少し離れた場所も必要だと思っています。

ーより広い地域を対象にした施設ということでしょうか？

富岡*交流センターのように市域で、色々な人が色々な場所から集まっている空間は、少し普段の自分が“薄まる”場所とも言えます。地域には、地域の子どもの「居場所」があって、それとは別に、より広い範囲を対象にして、地域を越えて人が交わる場所がある、というのが良いのかもしれませんが。何もしなくても、ふらっと立ち寄れて、自分とは違う色々な人と関わって、その中に自分が存在していることを感じられる場所。そんな場所を、これからもつくっていきたいです。

子どもの本質は変わらない。「育てる」のではなく、「育ちを後押しする」場所として。



松田 利恵（横浜市青少年交流センター コーディネーター）

交流センターの開館から閉館までの約14年間、施設の受付や利用する青少年への声かけなど「ロビーワーク」を担うコーディネーターとして勤務した。

●「居場所づくり」ってなに？

ーまず、交流センターでのお仕事について教えてください。

松田＊交流センターでは、部屋の貸出と施設を利用する青少年への「ロビーワーク」が主な仕事でした。子どもたちに声をかけたり、お話したり、子どもと関わることを、交流センターでは「ロビーワーク」と言って、一番大切にしてきました。元は別の施設でボランティアをコーディネートする仕事をしていたのですが、交流センターの開館時に異動することになって、交流センターのコーディネーターとして働くことになりました。

ー交流センターでコーディネーターとして働きはじめて、どうでしたか？

松田＊最初は「青少年の居場所づくり」と言われても、全然ピンとこなかったです（笑）どんな仕事をするのかも、本当に分からなくて。髪の毛が金髪のやんちゃな男の子が来たりして、最初は試行錯誤。そんな中でも、当時の施設長からは「とにかく子どもたちに声をかけて！」と言われて…（笑）分からないながらも、交流センターで子どもたちと関わる日々が始まりました。

ーいきなり「とにかく声をかけろ」って言われても、困っちゃいますね。

松田＊わたし自身も田舎育ちで、地域のコミュニティの中で育ってきました。おせっかいなおじさん・おばさんが身近にいる地域の横丁のような場所。なんとなく、そういう場所なのかな？というイメージはあって。不安な反面、「そんな場所をつくれるなら面白そう！」という気持ちもありました。

●交流センターで出会う子どもたち

ー実際に子どもと関わるようになって、どんな印象を持ちましたか？

松田＊交流センターの子どもたちと出会って感じたのは、子どもの“多様さ”でした。子どもが育つ環境は、本当に人それぞれ。例えば、保護者が夜の仕事をしていた、小学生のお姉ちゃんが幼稚園児の面倒を見ているような家庭の子どもがいる一方で、山の手に家がある経済的にとても恵まれた子どももいます。自分がこれまで出会う機会がなかった、知らない世界で育っている子どもたちがいることに、ある意味ではカルチャーショックを受けました。

ー交流センターには開館当初から様々な背景を持った子どもが集まっていた、ということですね。

松田＊そうです。なによりも驚いたのは、そんな育った環境がまるで違う子どもたちが、同じ場所で、同じように一緒に遊んで、過ごしていたこと。野毛という地域の特性もあるかもしれないけれど、「色々な人がいるから社会が成り立っている」という多様性に触れることは、子どもにとっても良い経験になっていたと思います。

ーカルチャーショックという言葉がありましたが、さまざまな背景をもった子どもとの関わりを通して、「難しさ」を感じることはありましたか？

松田＊いつも困っています（笑）目の前の子どもの後ろには、家族のことや色々な背景があります。もっと助けが必要だと感じながらも、“見守る”以上の関わりが難しくて…。「もう一步の難しさ」を常に感じてきました。「子どもへの働きかけを通して親子関係に変化が生まれた」というような幸運なケースもありましたが、交流センターのような場所で、「どこまで関わっていいのか？」「どこまで踏

み込んでいくべきなのか？」という迷いは、いつもありました。

●誰のための「居場所づくり」なのか？

―学校でも専門的な支援機関でもない青少年施設の職員という立場ならではの難しさですね。

松田*出会った子どもの中には、愛された経験のない子どももいて、とてもショックを受けたことがあります。「子どもは無条件に愛される存在」と思っていたけれど、そうじゃなかった。そういう子どもは本当にかわいそうに思えて…家庭や学校、地域で十分に見守ってくれる環境がない子どもを、せめて交流センターで愛情をもって見守ってあげたい、という想いがあります。どこにも受け入れられない子どもにこそ「居場所」が必要なのかなって。一番“面倒くさい”子どもを引き受けることが「居場所」の役割なのかも…交流センターでの子どもとの関わりを通して、そう考えるようになりました。

―そう考えるようになったきっかけは？

松田*閉館の1年前ほど前に、交流センターの近隣で傷害事件があったり、色々なことがあって、一時期フリースペースを閉鎖せざるを得ない状況になりました。どこにも「居場所」がなくて、甘えられる、頼れる大人が周りに居ないような子どもたちが、わざと大人を怒らせるような行動をとったり、暴れたりということが積み重なって、彼らが交流センターに居ることで他の子どもたちが立ち寄りにくい場所になってしまっ…。「みんなの居場所」であろうとしたことで、家庭や学校に居場所がない、本当に「居場所」を必要としている子どもたちを“排除”することになってしまった。その時は本当に大変だったけど、「もっとできることがあったじゃないか？」という悔しい気持ちと、一番しんどい状況にある子どもを受け入れることができない「居場所」って、なんだろう？という矛盾も感じていました。

―「みんなの居場所」を目指す中で、目の前の子どもを一番にしてあげられない歯がゆさがあったということですね。様々な葛藤を抱えな

がら子どもたちと関わってきて、一番嬉しかったことを教えてください。

松田*一番を決めるのは難しいかも（笑）どんなさやかなことでも、一人ひとり、それぞれの子どもが成長した様子を見せてくれる時があって、そんな時はいつも嬉しい気持ちになります。大変なことも沢山あったけど、以前は交流センターでやんちゃしていた子が、立派な社会人になって顔を見せてくれると報われた気持ちになるし、そうやって子どもたちが感じていることを話せる相手になれることが嬉しいのです。いつも悪さばかりしているような中学生の男の子に、ふとした時に、「（松田さんは）優しいひと」って言ってもらえたことは、思い出すと笑顔になってしまうくらい嬉しかった。（笑）

●子どもはキラキラしたエネルギーの塊

―14年間を通して、多くの子どもとの出会いがあったと思いますが、松田さんから見ていて、子どもたちの様子はどのように変化しましたか？

松田*子どもという本質は変わってないと思います。人と関わったり、遊んだり、素直だったり、甘えたりしながらも成長していく、という本質は変わってない。いつもキラキラしたエネルギーの塊で、「子どもと関わるって楽しい」と思わせてくれるのです。社会の変化に応じて、子どもたちが生きる環境は変わったのかもしれないですね。外国につながる子どもが増えたという印象はあります。その一方で、14年前にも同じ厳しさの中で生きていた子どもたちがいて、交流センターでの子どもとの関わりを通して、私自身がその「厳しさ」を理解してきたのかな、とも思います。

―松田さん自身が変化したと感じるところはありますか？

松田*寛容になったかも（笑）交流センターで色々なことを学んで、特に子どもに対しては割となんでも許せるような気がします（笑）子どもが何か悪いことをしても、それは子ども自身の問題というよりは、その子が育った環境や周りの大人、社会の問題

が大きい。家庭や地域や学校で、その子が十分に見守られていなかった、ということだと思います。そんな子どもたちを、交流センターでは愛情を持って見守ってあげたかったんです。

●ホッと一休みして、そこから巣立っていく場所
—交流センターにくる子どもたちにとって、松田さんや他の職員はどんな大人だったんでしょう？

松田* 私たちが子どもにしてあげられることは、たいしたことじゃないです。私たちの役割は、「育てる」というより、「育つのを後押しする」こと。子どもは自分自身で成長していく力を持っていて、私たちはそれを上手に支えてあげるのが役割なのかなって。多少のやんちゃは自分の責任でやればいいと思いますし…（笑）交流センターが閉館して新しい場所ができることになって、「新しい場所には誰がいるの？知らない人ばかりだったら、行かないから！」と子どもたちに言われて、やっぱり「ひと」なんだと改めて思いました。

—身近で見守ってくれる大人の存在は、子どもにとっても大きいかもしれませんね。

松田* そうですね。交流センターには職員以外にも、「施設を利用する大人」という存在がいて、その人たちに支えられてきた部分もとても大きいです。子どもが色々と迷惑をかけてしまうことがあっても、受け入れて、職員と一緒に子どもたちを見守ってくれました。色々な価値観の大人と出会い、関わることもできることも、子どもの成長にとってはとても大きな意味があると思っています。

—では、子どもたちにとって、交流センターはどんな場所だったと思いますか？

松田* それは難しい質問ですね（笑）私自身は、子どもにとって、「ホッとひと休みできる場所」であり、「そこから巣立っていく場所」でありたい、という気持ちで子どもたちと関わってきました。そんな場所であるためには、「大人の関わり」がすごく大事なんだと思います。場所があって、そばで見守ってくれる大人がいること。子どもって、

大人との出会いを通して、少しずつ社会性を身につけていきますよね。

●これからの子どもたちのために、できること
—最後に、これからの子どもたちが元気に育っていくために、どんな場所が必要だと思いますか？

松田* この先の未来、子どもたちが育つ環境がどんどん良くなっていくといいけれど、そうなるとは限りません。だからこそ、交流センターのような場所は絶対に必要だと思います。子どもたちがワイワイ交流できて、それを大人が見守っている場所、大変な子どももしんどい子どもも受け入れる場所。普通の環境なのかもしれないけれど、それが「普通」ではない子どもたちがいる…。もちろん、一見して「良い子」も、心の中では色々な悩みを抱えていて、「良い子」だからと大人の関心が後回しになってしまう子どもたちもいます。そんな子どもにとっても、見守ってくれる大人、想いを引き出してくれる大人の関わりは大切だと思います。

—子どもにとって「相談」できる場所ということでしょうか？

松田* 交流センターでのロビーワークの意味や役割を考える時に、「相談」と言葉が使われることが多いんです。でも、「相談」って何だろう？という気持ちもあって…。悩んでいることや、その子が抱えている課題が解決しなくても、誰かに話を聞いてもらうことで、解決の「糸口」が見つかることもありますよね。交流センターは、そういう場所だと思います。おしゃべりできる人がいる場所っていうか…。「相談窓口」という役割では、足りない部分があって、やっぱり場所があるってことが大事。わいわい来て、人に会って、自分の好きなタイミングでおしゃべりしたり、くつろいだりできる場所。そんな「交流」の場が必要だし、子どもたちのために使える場所が、もっと沢山できたらいいのに！と思っています。

第2部 青少年の居場所の“いま”

青少年の居場所の“いま”

公益財団法人よこはまユース

施設部長 平野 嘉昭

横浜市青少年交流センター(愛称：ふりーふらっと野毛山)は、青少年の居場所として平成14年(2002年)12月に開設された。

平成19年(2007年)には横浜市の施策として「青少年の地域活動拠点」の第1号拠点「ハッピースクエア」が保土ヶ谷区に開設され、これを機に南区、都筑区、栄区、磯子区、金沢区、神奈川区に青少年の地域活動拠点が開設されるようになる。また、市内80か所に設置されている地区センターでも青少年の居場所スペースを施設内に設置するところもあり、行政、民間を問わず、青少年の居場所への関心が次第に高

まってきている。特にここ数年は、「こどもの貧困」が大きな社会問題として取り上げられる中、「学習支援」や「こども食堂」といった新たな青少年の課題に対応した居場所づくりが展開されている。

本稿では、横浜市における青少年の居場所を紹介しつつ、それぞれの居場所の現状と課題について報告する。なお、横浜の居場所の現状として、横浜市内に青少年の居場所として設置されている施設やスペースをいくつかのカテゴリーに分類してみた。

＜図1 横浜市内の青少年の居場所の類型＞

＜図1 横浜市内の青少年の居場所の類型＞

領域	類型	主な施設名・団体名	概要
健全育成領域	放課後の居場所	1 放課後キッズクラブ	すべての子どもたちを対象に、小学校施設を活用して「遊びの場」と「生活の場」を兼ね備えた安全で快適な放課後の居場所を提供することを目的として横浜市が設置。
		2 はまっこふれあいスクール	放課後、通い慣れている小学校施設等を活用して、安全で健やかな放課後の居場所づくりを促進し、異年齢児間の遊びや交流を通じて、子どもたちの創造性、自主性、社会性などを養うことを目的として横浜市が設置。
		3 放課後児童クラブ	地域の理解と協力のもとに、保護者が労働等により、放課後に当該児童が帰宅する時間帯に家庭にいない児童の保護及び遊びを通しての健全な育成を行うことを目的に設置。
	地域の身近な居場所	4 地区センター	幼児からお年寄りまで幅広い地域住民が、スポーツ、文化活動等や相互交流を通じて、地域コミュニティの形成を促進することを目的として横浜市が設置。
		5 コミュニティハウス	小学校・中学校や既存施設を活用した地方公共団体の施設。生涯学習や地域活動などの身近な場として、また学校等と地域の交流や連携を深める場として横浜市が設置。
		6 青少年の地域活動拠点	主に中・高校生世代の青少年が、安心して気軽に集い、様々な体験や交流を行うことができる場所として横浜市が設置。
	地域の遊び場	7 プレイパーク	子どもたちが思いっきり遊べるように、極力禁止事項をなくし、自分の責任で自由に遊ぶことを大切に活動。
		8 こどもログハウス	横浜市内の全18区に1箇所ずつある子供向けの施設。ログハウスには、ネット階段やぐるぐるすべり台、地下迷路や図書コーナーなど子どもたちが喜ぶ遊具などを多数設置している。横浜市が設置。
	子育て型居場所	9 地域の子育て支援拠点	就学前の子どもとその保護者が遊び、交流するスペースの提供、子育て相談、子育て情報の提供などを行う子育て支援の拠点。利用登録のうえ、無料で利用できる施設。
		10 親と子のつどいの広場	地域の子育て中の親子(主に0～3歳の未就学児と保護者)を対象に、マンションの一室や商店街の空き店舗などで、子育て親子の交流、つどいの場の提供、子育てに関する相談の実施、地域の子育て関連情報の収集・提供、子育て及び子育て支援に関する講習などの活動を実施。
福祉領域	障がい児の居場所	11 障害児居場所づくり事業所	学齢期の障害児(小学生から高校生)が放課後や夏休みなどに毎日活動できる場所を確保し、余暇活動等を提供する事業。障害児がのびのびと過ごすことのできる場所を確保することで、心身の安定を図るとともに、社会性やコミュニケーション能力、対人関係能力等の向上を図る。また、親がきょうだい児に関わる時間を確保することや親の就労や社会参加の機会を確保する。

福祉領域	不登校・ひきこもりの居場所	12	民間の居場所	不登校など学校から離れてしまった子どもたちに学習機会を提供しているフリースクールや、居場所としての役割をもつフリースペース。
		13	地域ユースプラザ	「横浜市青少年相談センター」及び「若者サポートステーション」の支所的機能を有し、ひきこもり、不登校などの思春期・青年期問題の第一次的な総合相談や自立に向けた青少年の居場所の運営をするほか、地域で青少年の支援活動を行っているNPO法人等の団体や区との連携を図り、地域に密着した活動を行うことを目的として横浜市が設置。
	子どもの貧困対策の居場所	14	寄り添い型学習等支援事業	生活保護世帯や、生活困窮状態にあるなど養育環境に課題があり、支援を必要とする家庭に育つ小・中学生等に対して学習支援等を行い、将来の進路選択の幅を広げ、自立した生活を送れるようにすることを目的に各区で実施。
		15	学習支援	生活保護世帯や、生活困窮状態にあるなど養育環境に課題がある、または学習に遅れのある小中学生等を対象に学習支援等を行うことで、将来の進路選択の幅を広げ、自立した生活を送れるようにする民間の活動。
		16	こども食堂	主に貧困家庭や一人親家庭の子どもを対象に、栄養バランスの取れた食事や地域の人々とのふれあいの時間を無料または安価で提供する取り組み。十分な食事を取れなかったり、一人で食事をしていたりする子どもたちを支援するため、NPO法人などが実施。
	その他	17	外国につながる子どもたちの居場所	言葉や文化の違いにより日本の学校に馴染めない、勉強についていけない、高校進学が難しい等、様々な困難を抱えている子どもたちを対象とした子どもたちに学習支援や相談などの支援活動を行っている。「外国につながる子どもたち」とは「外国籍」「二重国籍」「日本国籍取得者」などの状況にある子どもを言う。
		18	LGBTの人々のための居場所	居場所の開設や相談事業など、同性愛者や心と体の性が一致しない性同一性障害を持った、性的少数者と呼ばれる人々の為の支援事業。横浜市ならびにNPO法人が設置。

【居場所のいま】

青少年の居場所と言っても、さまざまな居場所が横浜にはある。代表的な居場所のうち、いくつかの居場所を訪問させていただいたので、居場所の現状と課題についてレポートしてみた。

1 健全育成領域

(1) 寺尾地区センター(鶴見区)

昭和63年(1998年)4月に寺尾地区センターは開設された。開設当初から横浜市社会福祉協議会が当館の管理運営を担い、指定管理者制度導入後も同会が運営している。社会福祉協議会としては、地区センターには青少年を見守る人材が必要と考え、平成24年(2012年)頃から市内の居場所を運営している団体と関わることで積極的に居場所関連の情報を入手し、担当者も利用する子どもたちと積極的に関わることで、人間関係を構築してきた。平成26年(2014年)にはカレーパーティを企画し、地域の中学生との関係を深めてきた。

地区センターでは、「スタッフに青少年育成に熱心な人材がいても、組織的に対応がで

きないのが現状です。指定管理者の公募要項にも青少年の居場所を運営するという考え方もありません。地区センターの場合、地区センター本来の業務があり、なかなか新たな事業に手を出せないのが実情です。地域の人達、例えば地域の青少年指導員や主任児童委員といった方々と協働することではじめて効果的な事業展開が可能になるにではないでしょうか。」と森木副館長からコメントをいただいた。

加えて、地区センターの場合、指定管理者制度が導入されている関係から、指定管理者が変更になった場合、運営方針が大きく変わってしまうこともあり、それまで積み上げてきた青少年育成事業が指定管理者が変わった途端に引き継がれないことも多々ある。

(2) 鯛が崎公園プレイパーク(港北区)

市営地下鉄グリーンラインの「日吉本町」駅から数分の閑静な住宅街の中に、鯛が崎公園がある。週3～4日間開設されるプレイパークは誰もが参加できる居場所である。訪問した日には、近所の小学生から大学生までさま

ざまな年代の子どもや若者が遊んでいた。障がいのある子どもや社会になかなか適応できない若者も来ていた。また、学校に自分の居場所が見つからず、プレイパークに来て友達を作ることができるようになった、外国につながる子どももいるという。

スタッフの山口さん、漆原さんから「ここは遊びを通じて子ども同士がつながる場所なんです。プレイパークに来ると、いろんな子どもや大人と出会って話ができる。自分が気に入った大人を選ぶこともできます。スタッフはかなり長い期間継続的に活動し、小さいころからずっと見守っているので、子どもが成長するプロセスを見ることができます。また、子どもによっては家族状況などをスタッフが把握している場合もあります。」

訪問した日は、近所の放課後児童クラブの子どもがプレイパークに来ていた。最近では、地域の主任児童委員や近隣の学校との情報交換も日常的に行われており、地域での認知度も以前と比べてかなり高まっているように感じた。



(3) 踊場公園こどもログハウス(戸塚区)

市営地下鉄の「踊場(おどりば)」駅から5分。踊場公園の中にこどもログハウス「ニャンパク砦」はある。「踊場」は昔、猫が踊りを踊ったという昔話から「ニャンパク砦」という名前がついたとのこと。

開設当初、こどもログハウスはこどもたち

が自由に遊ぶために、スタッフによる「見守り」を中心に運営されていたが、最近では単に「見守る」ことよりも積極的に子どもとの関係を構築することを目標に、スタッフが子どもに声をかけて子どもの名前を覚えるようにしている。

2年前に訪問した時は、「朝から食事をしていない」「臭いがする」といった子どもがよく来ている話をスタッフからお聞きしたが、以前に比べそのような子どもは最近見かけなくなったとのこと。しかし、外国につながる子どもが淋しさを抱えてログハウスに来て、スタッフに声をかけてくることがあるという。

踊場公園ログハウスでは、地域の人々の協力を仰ぎながら、さまざまな事業を展開している。例えば、地域の主任児童委員と連携して子育て支援事業を実施したり、地域の青少年指導員が子どもの日のイベントを企画したりしている。また、平成28年度(2016年度)には地元中学生と一緒に夏休みイベントを実施する予定であるという。地域の大人や青少年と連携しながら居場所としての機能を高める方法は、子どもと地域の大人との顔の見える関係づくりという点でも効果的な方法ではないだろうか。

2 福祉領域

(1) 民間の居場所ー

フレンドリースペース金沢(金沢区)

京浜急行「金沢文庫」駅からバスで10分ほどの閑静な住宅街に「フレンドリースペース金沢」がある。平成7年(1995年)に並木ケアプラザで「金沢虹の会」として発足し、2003年度(平成15年)から区役所との協働事業として現在の場所で事業が始まった。

子どもにとって「安心できる居場所」づくりを目指している。年間登録している子どもは約70人。1日10人前後の子どもが来館してい

る。対象は小中学生だが、不登校の中学生が多い。特にひとり親家庭や病気の家族がいるなど経済的に恵まれない家庭の子どもが多いのも最近の特徴である。来所する理由としては、「学校や家庭に居場所がない」「家に居るよりもここに居たい」が多い。

会の角田会長からは「ここでは『自分のありのまま居ていいんだ』という安心感が子どもたちにはあるようです。スタッフは子どもたちの動きに目配りはするが、プログラムは強制せず、どのようにすごしてもよいという安心感を提供できるようにしています。」

「最終的には子どもたちが社会や学校に戻ることが目標ですが、大学進学や就職など次のステップを探すことが課題となっています。また、ひとり親家庭の増加など家庭環境が変化する中、会として子どもたちをどこまで面倒を見るかが課題となっています。」と現在の課題をお話していただいた。



(2) 北部ユースプラザ(都筑区)

北部ユースプラザは、市営地下鉄「センター南」駅から徒歩5分ほどのビルの3階にある。

訪問した時は、7、8人の若者が談笑したり、ゲームに興じたりしていた。その日は音楽プログラムの日だったために、隣の部屋では数人がバンド演奏を楽しんでいた。

北部ユースプラザは、横浜市青少年相談センターや若者サポートステーションの支所的機能をもった施設である。方面別に設

置され、横浜市では東部、西部、南部、北部の4箇所が設置され、北部ユースプラザはNPO法人「月一の会」が運営を担っている。

ひきこもり、不登校などの思春期・青年期問題の第1次的な総合相談や自立に向けた青少年の居場所の運営、「困難を抱える若者を理解するためのセミナー」、利用者の就労の場を確保するための応援パートナー募集など地域に密着した活動を行うことを目的としている。

会の梅山理事に居場所についてお話を伺ってみると、「15歳から39歳までが利用対象ですが、実際の利用は20代後半から30代までの若者です。特に家に居ても自分がどうしたらよいかわからない、精神的に傷ついている、疲れている若者が大半で、ユースプラザに来てスタッフや他の利用者と話をすると元気になり、自信がついてきます。また、他の若者がアルバイトを始めると、それが刺激になって自分も動くようになるといったパターンが来ています。」居場所で他の若者と交流することで、エネルギーを蓄え、自発的に活動するようになるという。実際、利用者の多くは1年たっても自発的に活動しない人はいないとのこと。

居場所のスタッフは、利用者の話を聴くことを大切にしており、聴くことで安心感を与えるとともに、利用者との信頼関係を結ぶことができるという。

(3) 西区第6地区子ども食堂(西区)

西区地域福祉保健計画(通称「にこまちプラン」)の作成時において、第6地区の子どもたちの多くがファミリーレストランなどで子どもたちだけで夕食をとっている実態が明らかになり、みんなで食事ができる機会を提供したいという地域住民の思いから、「第6地区

子どもの居場所づくり検討会」を立上げ、「子ども食堂」をスタートさせた。

訪問した日は西区第6地区子ども食堂の第2回目の開催だった。20人ほどの小学校低学年や中学生、数人の高齢者の方が自治会館の2階でカレーライスを楽しそうに食べていた。当初は、前半を宿題などの学習支援を行う予定だったが、子どもたちのほとんどが宿題を持ってこなかったのが、急遽別のプログラムに変えて対応したようだ。資金は町内会の関係者からの寄付金や寄付の食材で賄い、会場については利用料がかからない、自治会館を使用している。

この日は第6地区自治会や浅間台地域ケアプラザ、西区社会福祉協議会などの主催者だけでなく、西区役所や同区第3地区で子ども食堂を準備している、地区センターや障がい者施設の責任者も視察に来ており、この活動に対する注目度の高さを窺うことができた。



3 その他

(4)信愛塾(南区)

南区中村町にある信愛塾は、昭和53年(1978年)就学通知が来ない在日外国人の子ども会として発足し、その後、補習教室、韓国・朝鮮語講座、識字教室、地域学習会を始める。平成16年(2004年)に「在日外国人教育生活相談センター・信愛塾」と名称を変更し、今日に至っている。

主に中区、西区、南区から外国につながる

子どもは来ているが、中には市外からも子どもや家族が来ているという。在留資格の問題、日本語の理解・不登校などの教育課題、貧困、医療の問題、入居差別、生活保護など、利用する子どもや家族にはさまざまな課題を抱えている。

このような課題を解決するため、信愛塾ではさまざまな活動を展開している。夏休みなどの長期休みには学校給食がなくなるので、食べられない子どもや家族にはラーメンなどの食材を届けるなどのサポートを行っている。また週3回、子どもたちの居場所として音読や宿題の指導や進学相談などの学習支援、教育委員会との共催事業として教員対象の中国語講座、市民講座などを行っている。

訪問した際、竹川事務局長から居場所を運営する考え方をお聞きした。「在日外国人の子どもや家族の命を守ることを信愛塾では大切にしています。子どもや家族が病気の場合は、専門機関と連携して対応しています。また、利用する子どもがリラックスできることをめざしています。リラックスできて初めて学習支援が可能になります。おなか为空いていたら、勉強する意欲もわかないですから。」学習支援の必要性が叫ばれる今日だが、自発的に学習できる意欲を育てるには、まず意欲が育つだけの環境や条件の整備が大事であることを竹川さんから教えていただいた。

【居場所の現状と課題】

いくつかの居場所を訪問させていただき、子ども・若者にとっての居場所の条件について改めて考えてみた。

(1)子ども・若者にとって安心できる場所であること

信愛塾やフレンドリースペース金沢のように、居場所は子ども若者にとって「自分のありのままで居ていいんだ」という安心感が感

じられる場所ではなくてはならない。

先ごろ発表された「横浜市寄り添い型学習等支援の検討」（横浜市立大学子ども若者の居場所研究会 平成28年3月）では、寄り添い型学習等支援の委託法人を対象としたアンケートを実施した。その中に、「学習支援の前に子どもにとっての居場所とすることが大切」とあった。学習支援が目的の場であっても、まず子どもにとって安心できる場所であることで、はじめて自発的に通うことができることが必須条件である。加えて、「子どもにとって楽しい場所、ワクワクする時間が過ごせる空間」であることも大事である。ワクワクする体験、楽しい時間なくして、子どもや若者の自己肯定感を養うことはできない。

（2）さまざまな人々との交流の場であること

プレイパークや子どもログハウスは遊びを介して子ども同士をつなげる場所である。また、北部ユースプラザは、他の若者やスタッフとの交流を通じて相互に刺激し合い、社会に参加する力を蓄える場所である。居場所そのものがひとつの小さな社会であり、子どもも若者も大人も交わることで、さまざまな価値観や生き方、考え方を吸収できる場である。

居場所はこのような子ども若者を含め、誰でも受け入れる間口が広く、開放的な要素が求められる。



（3）子ども・若者に寄り添うスタッフがいること

フレンドリースペース金沢でお話を伺った際、「スタッフはあくまでも『地域のおばちゃん』として子どもたちに寄り添うことを大切にしている」というお話を伺った。また、先の「横浜市寄り添い型学習等支援の検討」の中でも、寄り添い型学習等支援の委託法人を対象としたアンケートから、「2時間ひたすら世間話で終わることは多い」といった回答が数多く寄せられ、「支援者に求められる力量は何だろうか。学習支援事業であるが、学習指導の力を求める意見はほとんどない。求められるのはむしろ、子ども一人ひとりに応じて子どもに合わせて寄り添っていく力である」とコメントしている。専門的な力量よりも子ども若者との信頼関係を結ぶことができる力であり、子ども若者にとって相性の良いスタッフがいることである。

力量だけではない。子ども若者が小さい頃から自分の成長の過程を見守ってくれるスタッフの存在は重要である。特に子ども若者が居場所を卒業しても、馴染みのあるスタッフがいることで、何かあればいつでも戻ってこられる安心感も、子ども若者にとって魅力ある居場所の条件ではないだろうか。

3年前、さいたま市の学習支援事業を見学する機会があった。運営しているNPO法人さいたまユースサポートネットの代表理事の青砥恭さんは、「学習支援では学習を強要するのではなく、子どもたちとつながることが大事」と言われた。学習や遊び、おしゃべりといった活動を通じて、ボランティアと子どもとが関係性を構築することが優先するのかもしれない。

（4）地域社会との連携があること

居場所にとって大切なことは、地域社会に居場所が理解されているかどうか、という点である。多様な子ども若者が集まることで、

持ち込まれる課題も多様になる。地区センターやコミュニティスクールのように、子どもたちを見守るスタッフも十分配置できない場合は、地域社会の支えが必要である。子どもたちの面倒を見る人材の導入だけでなく、継続性のある青少年施策を打ち出すためには、青少年指導員や主任児童委員、学校、NPOなど地域の社会資源との連携、協働が不可欠である。北部ユースプラザでは、若者の就労体験の場を確保するため、周辺の企業にその受入れを呼びかけている。

(5) 子ども・若者が抱える課題を受けとめる場であること

居場所には様々な子ども若者がやってくる。障がいのある子ども若者、家庭や学校に居場所がない子ども若者、貧困による課題を抱えている子ども・若者。最近はどこかの居場所でもこのような子どものことが課題となっており、福祉領域の居場所だけでなく、健全育成領域である地区センターやログハウス、プレイパークなどでも課題を抱えた子どもの対応がスタッフの課題となっている。これらの課題を軽減、解消するためには、児童相談所や相談センターなどとの専門機関との連携は不可欠で、スタッフのユース・コーディネーターとしての力量が問われている。

平成25年度(2013年度)から公益財団法人よこはまユースでも毎年「ユースコーディネーター養成研修」を実施しているが、参加希望者が多く、さまざまな居場所でこのような子ども若者への対応について悩んでいる実態が窺える。

【まとめ】

最近、全国的に「こども食堂」の話題が注目されている。子どもの貧困が大きな社会問題として取り上げられる中、東京を中心に「こども食

堂」が各地に立ち上がっている。横浜でも最近「横浜こども食堂ネットワーク準備会」が立ち上がり、これから立ち上げようとする関係者も含め、約80人が集まったという報道があった。

よこはまユースにもいくつか「こども食堂」の立ち上げに関する情報が入っているが、今後かなりの速さで同事業が各地域で立ち上げられるのではないかと予測している。

この「こども食堂」については、これまで市民活動に縁がなかった人が担い手になっているケースが多く、自分もぜひ関わってみたいとボランティアとして参加を表明する人も少なくない。子どもにとっては何かが食べられる、友達と一緒に楽しく食事ができるという意味で魅力ある居場所のひとつになると思うが、身近な地域の居場所として子どもたち同士や大人との交流の場として、また地域の子どもたちや関係者の拠点として食堂だけではない機能も発揮できるのではないか、と期待している。どのような拠点や居場所になるのか、まだ予測がつかないが、地域の青少年育成の拠点のひとつになる可能性があるように思う。居場所と言うと、行政が設置した場所が多いが、今後は地域住民による新たな居場所、が展開されることを期待したい。



第3部 これからの青少年施策を考える

【特別寄稿】

(1) 子どもの居場所の原点とその変容をめぐって

駒澤大学教授 萩原 建次郎

【特別寄稿】

(2) 求められる青少年施設職員の力量

公益財団法人京都市ユースサービス協会常務理事 水野 篤夫

(3) 新たな青少年の拠点をめざしてー「青少年交流・活動支援スペース」の概要ー

〔特別寄稿〕

(1)子どもの居場所の原点とその変容をめぐって

駒澤大学教授 萩原 建次郎

1. 青少年施策化以前の子どもの居場所

(1)子どもの声なき声としての居場所

もともと「子どもの居場所」は政策の言葉ではなかった。政策の言葉として広範に流布されるきっかけとなったのは、1992年に文部省から出された「学校不適応対策調査研究者協力会議」最終報告書『登校拒否(不登校)問題について－児童・生徒の心の居場所づくりを旨として』において、初めて公文書に「居場所」という言葉が使用されてからだ。当時は「児童生徒にとって自己の存在感を実感でき、精神的に安心していることのできる場所」を「心の居場所」と説明し、すべての子どもに対して、学校が「心の居場所」となることの重要性が強調された。ここから「心の居場所づくりとしての学級経営」といったタイトルのついた教師向け指南書が出されるなど、「居場所づくり」という言葉が学校教育関係者にも広く浸透していくこととなる。

しかしそれよりも10年以上前から「子ども・若者の居場所」という言葉は、不登校の生きづらさを抱える子どもたちの居場所づくりとして、市民の手によって特別な意味を帯びて浸透していた。当時、子ども・若者の居場所が社会的な語りとして認知されたきっかけは、登校拒否・不登校児童・生徒の急速な増加が社会問題化したことにある。1974年に高校進学率が90パーセントを越えると同時に、中学生の不登校が増加に転じるようになり、現在も不登校児童・生徒の割合は40年間大きく変わらずに推移している。

当時、学校に行けない子ども・若者にとって、なぜ自分が学校に行けないのか、なかには

自死に追いやられるほどに学校に行かない、行けないことが「罪悪」なことなのか、当事者も家族も教育関係者も明確に答えられずに困窮していた。そこに追い討ちをかけるように精神医学者の稲村博が登校拒否を「思春期挫折症候群」と名づけ、専門的な医療チームをつくり、「治療」すべきであると主張をし、学校に行かないこと、行けないことが社会的規範から逸脱した「病理」であり、「病気」とであるとみなされる風潮も起こった。

そうした社会的な風潮のなかにあって、その一方で学校に通うというメインストリートからはずれて生きる子どもたちに、当事者の親や一部の教育関係者たちが、フリースペースやフリースクールを作り、子どもの生きづらさに寄り添った居場所をつくっていった。1984年には「登校拒否を考える会」が発足し、全国のフリースペース・フリースクールのネットワークが生まれ始める。

(2) オールタナティブ教育の展開と多様な市民運動への派生

同時代には、社会全体として学校教育への管理主義、競争主義、点数主義への批判が高まり、それまでの公教育とは別な教育、学校のあり方を模索するオールタナティブ教育の言説や教育実践も注目されていく。1985年にはフリースクール「東京シュレー」や点数主義を廃した自由教育学校の「自由の森学園中等学校・高等学校」が開校し、88年には「北星学園余市高校」が全国から高校中退者を受け入れ、92年にはニールの自由教育学校をモデルとした「きのくに子どもの村学園」が相次いで開校するなど、学校教育

のあり方を問い直す取組みが展開していく。

これと平行して、1975年にドイツ文学者の子安美知子によって紹介されたドイツのシュタイナー学校の実践レポート『ミュンヘンの小学生』が出版され、81年には日本シュタイナーハウスが開設されると、オールタナティブ教育への機運が高まっていく。このような背景を伴いながら、シュタイナー学校の創始者であるルドルフ・シュタイナーの思想と実践が翻訳され、日本に紹介されていくことになる。

これら学校教育をめぐる社会的なうねりが異なるきっかけをもって発生しつつ、あたかも支流が合流しては分岐し、教育問題から社会のあり方、現代生活のあり方を問い直す市民運動へと合流したり、派生したり、ゆるやかなネットワークをもった社会運動へと展開した。それは例えばフリースペース、フリースクールづくりから子どもの食生活や遊びの環境問題へと目が開かれ、食品添加物の問題から、オーガニックな食材を使ったカフェ、レストラン、パン屋を開いたり、農業にたずさわったり、まちづくりや反原発運動に関心を広げていく。また、生の全体性を回復しようとするホリスティック医学・教育の市民的な展開と連動するなど、領域横断的で多様な市民運動として展開する。

その意味で、特別な意味を帯びた「居場所」という言葉は、不登校・登校拒否問題を切り口としながらも、当事者である子どもや若者の声に寄り添い、そこに大人も含めた現代社会の生きづらさを敏感にキャッチした市民が、人間の生の在り様や在り方を根底から問い直す感性的な表現として生み出されていったといえる。それは、深く子ども・若者の感性に響きあう大人と共に、人間社会と生の在り方を深く問い直す、いわば存在論的な意味を色濃く帯びた言葉であった。

2. 「子どもの居場所づくり」の施策化と拡大

(1) 「新子どもプラン」(2003年)から「地域教育力再生プラン」(2005年)まで

冒頭で述べたように、「子どもの居場所づくり」という言葉が国や自治体の政策の言葉となったきっかけは、1992年に当時の文部省から出された報告書であった。その後、具体的施策として全国的に展開したのが2003年、2004年と立て続けに出された文科省の「新子どもプラン」「子どもの居場所づくり新プラン」である。「新子どもプラン」ではその前に出された「全国子どもプラン(緊急三ヵ年計画)」を引き継ぎながら、「子どもの居場所再生事業」が新たに加わったものであった。さらに翌年の「子どもの居場所づくり新プラン」への移行で「地域子ども教室」が登場する。現在、全国の小学校で展開している「放課後子ども教室」の原型である。

筆者も地域子ども教室事業にたずさわった青少年団体と協議会メンバーとして3年間関わり全国の実践を調査した。そのときは、活動場所は各受託団体にゆだねられており、公民館や青年の家、野外キャンプ場といった社会教育施設や公園、神社、お寺等、地域コミュニティの中核となる場所での活動が、それぞれの団体、地域の実情にあわせて展開されていた。活動内容も団体の枠を超えて、団体同士での協力や連携もあったり、多世代の交流や会員以外の地域の子どもたちや保護者に参加機会が開かれた多様な展開が起こった。

(2) 「地域子ども教室」から「放課後子ども教室」への移行と居場所の質的変容

しかし、こうした活動の広がりや深まりは突然はしごをはずされて縮小と変質を余儀なくされる。「子どもの居場所づくり新プラン」の三ヵ年が終了した2008年に出された文科省と厚労省との共同事業の「放課後子どもプラン」では、厚労省の全児童対策と合わさる形で、放課後の学校を活動の前提とした「放課後子ども教室」へと

移行する。それまで「地域子ども教室」であった名称が「放課後子ども教室」と変更されたことの意味は大きい。それは「地域」から「放課後」へと冠を付け替えることで、学校を意識したものへ変質し、活動場所もあくまで放課後の学校であるということを端的に示すものであった。こうして政策における「子どもの居場所」は「学校の校庭や教室等に安全で安心して活動できる子どもの活動拠点」（文科省の定義）へと移行することになる。

その後の学校支援地域本部や学校・地域コーディネーターの設置の動きと併せると、子どもの育ちの場が学校に集約され、地域や青少年団体はあくまで学校教育の資源として利用されていく道筋が明確になってくる。これは子どもの側に見れば、次のような制約が生まれることになる。それは①参加対象が小学生に特化されてしまうこと、②日常生活のほとんどが学校空間に限定されること、③学校の人間関係がそのまま持ち込まれていくこと、④かかわる大人がみな「先生」となり、放課後の大人との関係性が「先生－児童」の関係性に限局されていくことなどが挙げられる。

その意味では、放課後子どもプランを端緒とする「子どもの居場所づくり」は、1980年代に市民ベースで生まれていった学校外の子どもの声なき声に耳を傾け、活動を共に模索しながらつくっていった居場所とも、地域の青少年団体と多様な活動団体が手を結び、子ども主体の多様な活動スタイルと内容を展開していった「地域子ども教室」とも方向性が大きく異なる質をもっていることは明白であった。それは子どもにすれば大人と学校の教育的視線のなかで、再び学校空間に囲い込まれていくことを意味していた。「放課後子ども教室」は大人や保護者からすると「安心で安全な」活動ではあるが、子どもにとってはかつて原っぱや雑木林、路地で自律的で冒険的探索的に遊んでいた放課後とはおよ

そ質的に異なる仕組まれた教育空間へと一層囲い込まれる結果を生んだ。そこには確かに安全で安心して子どもが学校外で遊べる生活空間、のびのびと冒険し探索できる自然空間が大幅に縮小したこと、地域の見守りのネットワークも衰弱していったこと、塾やお稽古事で放課後の子どもの時間が占有されていったことが複合的に重なり、学校に集約したほうが居場所づくりとして効率的であるという事情もあっただろう。

しかし、そうした囲い込みへの息苦しさを身体的に表出するように2006年から小学生の暴力発生件数が増加しはじめたことは注目すべき問題である。2013年になると、ついに高校生の暴力発生件数を上回る状況に至る。

3. これからの青少年施策の方向性

ここまで子どもの居場所をめぐる歴史的経緯をふりかえり、その質的変容を見てきた。現在の子どもたちが置かれた日常の生きづらさ、不自由さに気づくとき、あらためて私たちはそれが社会的に注目された1980年代の、子どもたちの声なき声とそこに寄り添った大人たちの想いに視線を向けるべきだろう。そこでは、居場所とは①**何度も挫折や失敗を繰り返し、傷ついてきた子どもたちの声なき声に耳を傾ける他者が居てくれる場であること**、②**自ら探索し、冒険し、いまここに生きている世界の意味と自分自身をつかみとる自己形成空間であること**、③**あらゆる生命とのつながりのなかで生き、生かされているという事実**に立ち返らせ、**生の全体性の回復に向けた場であることが志向**されていた。こうした居場所は、演劇、音楽、アート、ケア、統合的な心身を回復するワークショップ、子どもや若者、女性、高齢者、障がい者、社会的なマイノリティの視線からとらえなおすまちづくり、包摂的で持続可能な社会を志向したさまざまな取り組みへとつらなるベースキャンプ

となってきた。

その意味で、今後の青少年施策は居場所のチカラを推進力として、子ども・若者と多様な大人が共につくる持続可能な社会づくりという視点を個別の施策の根底におく必要があるだろう。

〔特別寄稿〕

(2)「求められる青少年施設職員の力量」

公益財団法人京都市ユースサービス協会

常務理事 水野 篤夫

1. 青少年施設職員に求められること

10代・20代を対象とするオープンな利用の場の青少年施設の職員には、いろいろな若者の課題に直面し、“揺さぶられる”ような出来事に対応していくことが求められます。やんちゃな中高生の問題行動を止めなければならない時、性の悩みを訴えてくる20代の相談を受けた時、働く場で傷つき悩む若者を見た時、貧困や不安定な家庭状況などを抱えた若者を支えようと思った時など。これらから逃げてしまえば話は楽ですし、職員として悩むこともないのですが……。

2014年から、よこはまユースと、札幌、京都の青少年育成を主目的とする財団の共同による調査を行いました。テーマは、職員の専門性と組織のあり方です。現場職員だけでなく管理部門の職員にもヒヤリングして、事業を遂行する中に埋め込まれた職員の専門的能力を抽出することと、組織がどのようにそれを捉えているかを調査しましたが、そこでまず確認されたのが以下の4つの点です。私たちの仕事(ワーク)は以下のことが出来(てい)るかという問いです。

- ①若者のニーズをとらえることができること。
- ②若者を巡る社会的な課題を把握し、ワークの範囲と目的を説明できること。
- ③若者の変化を促すことができること。
- ④関わる対象は誰なのか、なぜその対象に関わるが必要なのか説明できること。

どうでしょう？こうした点が必要だなという

ことは青少年施設職員には納得されるのではないかと思います。しかし、同時にこのことを実現するには相当な能力が求められます。それについて、「何となく必要なんだろうなあ」くらいに思っていると、自分の仕事の明確な方向性も、どのように学び、どのように自分を鍛えていけばいいのかという方法も見えてきません。その上、ボランティア・有志指導者との役割の違いも見えてきません。そこで、明確に意図を持ってトレーニングされるべき能力の集まりとして、「専門的な」能力を持つことの必要性が立ち現れてくるのではないかと思います。

2. エピソードを通して職員の能力を考える

ここで、一つのワークの場面を取り上げてみたいと思います。

「ある政令市での中学生学習会の立ち上げ場面」

この学習会は、経済的に困窮する家庭の中学生を対象としたもので、市から委託を受けて職員(W)の所属する団体が運営に当たっていましたが、従来の実施場所に加えて、ある区で新たに学習会を立ち上げてほしいとの要望が行政からありました。そこでWは準備を始めることになりました。

会場は区が紹介してくれた場所が使いそうだったので、学生を中心とするボランティアの確保とコーディネーターの選任が最初の課題となりました。Wは会場近くの大学に知り合いの教員が居たことを思いだし、連絡を取りました。幸いに社会福祉学を教えるその教員から事業の意義に共感してもらい、学科としての全面的な

協力を得ることが出来るようになりました。授業やゼミを通して学生に声を掛けてもらったところ、20人あまりの学生が学習会への参加を申し出てくれました。一方、区を通して中学生への声かけが行われ、何人かの中学生が参加してくれることになり、これで、学習会の立ち上げの見通しが立ちました。そして以下は学習会の初回での場面です。

会場に大学生ボランティアが集まり机などを準備していると、参加を申し込んでいた中学生が順次やって来ました。Wは、最初にこの場がどのような意味を持っているかを、大学生・中学生同時に伝えましたが、その際に、決して「貧困家庭」に育っているから参加してもらっている…との表現は使わないように説明しました。それは、大学生に対しては、“この場の意味を説明する時のモデル”となることをねらっていたし、中学生には、“安心してこの場にいられる”と思ってもらうことの両方を考えたからです。「落ち着いて家で勉強しにくい人(中学生)のための学習の場」といった表現にしました。

自己紹介の後、大学生たちは、準備ミーティングで打ち合わせたように、個々の中学生に1対1～2くらいで付いて、勉強したいことや得意科目・苦手科目などを聴き取ってから勉強を始めました。やがて、その日の学習の時間が終わり、中学生が帰るという場面で、Wから大学生に「部屋の外まで見送るように」促します。大学生たちは、それぞれ勉強相手になった中学生を見送りに出て、迎えの人と一緒にだったり同級生と一緒にだったり中学生が帰っていくまで見送りました。中学生に最後まで“自分は見守られている”という感覚を持ってもらいたいと考えたからです。同時に、勉強が終わった後のそうした時間にこそ、中学生の本音や生の気持ちが吐露されることがあるとの経験からでした。

その後、ふりかえりミーティングを行うことを学生ボランティアに告げ、丸くイスを並べて

もらいました。円となつてすわりながら、初日の感想を聞くと共に、個々の中学生の様子をボランティアに語ってもらいました。そこで、大学生の配慮が感じられれば、それを指摘し(「それはとても良い発見だったね」「その点は次の課題だね」等)、学習会がねらいとすることを自然に伝えるようにしました。その時、一人の学生がおずおずと発言しました。「見送りに出た時に、担当した中学生から、最近親があまり家に帰ってこないとの話を聞いたのだけど・・・どうしたらいいんでしょうか」。Wは、「そうした“秘密”や問題を感じる話を中学生から聞いたら、自分で抱えないでコーディネーターかWに伝えること。中学生との間に秘密を持たないことが大事」と言って、同時にその学生が迷いながらも発言してくれたことを褒めました。こうした学生が見聞きした事柄で共有が必要と思われることは、後で区の担当者にも伝えました。

Wとしては、そうした一つ一つのやりとりを通して、学習会という場におけるルールやモラルを共有化することにつながると考えたし、事実、最初に行われたこうした進め方や考え方は、その後の学習会のルールとして学生に受け入れられ継続していきます。1～2ヶ月の間は、Wは毎回の学習会に出席したが、次第に学生ボランティアの中で、リーダー／サブリーダー／会計担当といった分担を作るよう促し、ミーティングや事前準備なども学生ボランティアが主体的に進められるようになるに従って、何回かに1回の参加にしていきながら、必要な場面でアドバイスや問題が無いかを確認するようなスタンスに移行していきました。

ここでWは、まず人と組織をコーディネートすることから始め、中学生と大学生が出会い、良い関係を作ることが出来るような場づくりを行ったといえます。

順調に始まった学習会ですが、ある時「地元の自治会長から会場の使い方でクレームがあった」ということで、話し合いの場を持つことになりました。会長さんからは「後片付けや戸締まりがちゃんとしていない。けしからん」というお話でしたが、Wから、最初に不十分だったことをお詫びするとともに、学習会の意図を説明し直しました。すると会長は「そんな活動とは知らなかった。塾のようなものかと思っていた。そんなことなら全面的に協力する。改善点はあるとしてもぜひ会場を活用してほしい」と急に態度を変えられました。

どうなることかと案じていたのですが、このときは結果として地域の協力者の理解を拡げることができました。地域の中で活動する際によくあるエピソードです。

3. 「地域社会」と青少年施設

こうした実践例について、まず、ミクロ的に捉える見方があります。中学生や大学生ボランティアとの関係性はどのように築かれたのか、プログラム運営はどう行われたのか、中学生・大学生・大学教員などを含む集団はどのように作られたのか等に注目して、そこでの職員の役割と能力を考える見方です。一方で、もう少し視点を広げて捉える見方があります(メゾレベルの捉え方)。そこでは、大学との関係づくり、区行政や市行政の担当者との関係づくり、会場提供してくれている地元団体との関係づくり等、外部組織・団体との関係調整(コーディネート)という職員の役割と能力が問われてきます。

これまでの青少年施設やその職員は、どちらかといえば施設にやってくる若者だけを相手にして、その生活背景に関わるものが少なかったように思います。しかし、特に中高生年代の利用が多い施設では、彼／彼女らのふるまいに、地域背景と家庭の状況が色濃く反映されている

ことに職員も気づいていて、若者が生きる世界としての「(近隣)地域」にアプローチしていく必要性が模索されていました。そこに、子どもの貧困の社会問題化などを受けて、これからの青少年施設は、地域で青少年を支える地域づくりにも取り組むことを求められるようになってきたといえます。それは大きく言えば、学校・家庭を行き来する青少年に地域の中での居場所を提供する役割です。そして職員は施設内に籠もるのではなく、学校・家庭と地域をつなぐ媒体となれるような働きが求められ、施設をそのためのハブ(結節点)となるよう運営していくことが求められるといえます(これがマクロな見方ともいえます)。

上記の事例は形は学習会ですが、中学生たちの背景には家庭の不安定さ、学校での不適應、それらに起因する学力の不足、といった多重の問題が存在することも珍しくありません。そこで青少年施設スタッフが出来るのは、中学生たちが地域における居場所を作る支えをすること、多様な他者と出会える(例えばボランティアの大学生たち)場を作ること、そのために地域資源と中学生たちを媒介する役割を果たすことです。

4. 「能力」を構造的に見る

先の3団体調査では、求められる能力として以下のような6つが抽出されました。すべてを網羅したものではないし、まだまだ吟味が必要な段階ではありますが、おおよそ若者と関わる施設現場職員に求められる力が表されていると思います。

- ①若者と直接関わり、信頼関係を構築する能力。
- ②自らの感情を用いてワークを行う能力。
- ③新しいこと、若者を巡る課題、若者の思いを感じ取るアンテナ(感受性)を持つこと。

- ④非定型的な関わりの場をワークに用いる能力。
- ⑤全体の文脈(目的)に適した場づくりを行う能力。
- ⑥人と組織をつなぐコーディネート能力。

学習会立ち上げの事例でも、こうした能力が用いられたのですが、その際に、単に若者と直接関わる役割だけではない、地域課題と関連づけて「場」を構成する能力が強く問われていた訳です。

同時に、これら6つの“能力“ですが、実はとても複合的な力を含むもので、それを羅列されてもとまどってしまいます。また、個々の職員が素晴らしい能力を持てば、それだけで良いのかといえそうでもなくて、“能力”はチームとして発揮されて良い成果を生むことが出来るものでもあります。

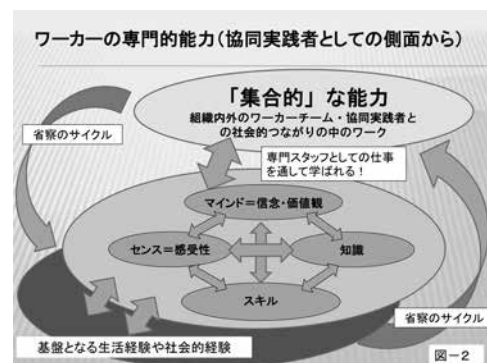
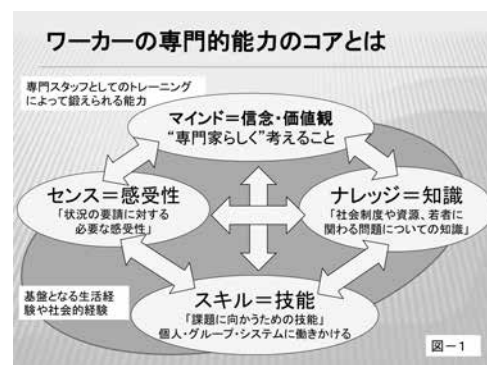
私は上記のような能力には、4つのコア(核となるもの)があると考えています(図1・2)。人と関わり支えるという仕事は、一つとして同じ場面がありません。だから前例や定石というものが役に立ちにくいのです。その場の求めることへの感受性が欠かせません。また、決まり切ったテクニック(技術)というよりワーカーに身体化されたスキル(技能)として力が発揮されることも多いと言えます。しかしこれらは、しっかりとした知識基盤に基づかないと、独りよがりの思い込みや誘導になってしまう危険性も孕みます。素朴な感覚だけでは、自分の中の偏見をそのまま仕事に反映させてしまうこともあるからです。

ある青少年施設の職員がこんなことを話していました。スポーツ室にブラックアメリカンの長身の青年が来て、中学生たちがバスケットボールをしているのを見ていて、「彼らにバスケを教えてやってほしい!」と声掛けしたそうです。でもその青年がもじもじしているのどうしてだろうと思っていたら、彼が「僕はバスケは苦手なんです」

と言ったということです。“黒人はスポーツ能力が優れている”はず、という自分の「偏見」に気づかされたという話です。これは、単に知識を持っているだけで超えられる課題ではなくて、倫理観や価値観、もう少し言えば“若者と関わる専門職らしく考える”ことができるかどうか問われるということです。自らの中の偏見を見つめ、やっていることの前提を見直し続ける作業が、職員として専門的な力を持つために欠かせないプロセスなのだと思います。

個々の職員はこうした能力を、仕事を通して学んでいきますが、それは孤立した作業ではなく、組織的に、集団的に行われる必要があります。事例に挙げたWの活動も、個人的な経験としてとどまるのではなく、事実を同僚や上司と共有しながら、前提としている考え方で踏み込んで共同してふり返っていくことで、青少年施設の職員としての力量が身についたものとなっていくのだと思います。

図1・2「青少年施設職員の能力(4つのコア領域)」



(3)新たな青少年の拠点を目指して ―青少年交流・活動支援スペースの施設概要―

平成27年度末をもって閉館することになった横浜市青少年交流センターの代替事業として、平成28年4月から桜木町びおシティ6階に、「青少年交流・活動支援スペース」がオープンします。

●「居場所」から、社会につながる拠点へ

多くの人々が集まり・交流する拠点をづくり、青少年がさまざまな「人、考え方、体験」との出会いを通じて、“社会につながり、社会で生きる力”を育みます。

青少年の「居場所」や活動の場の提供など、青少年の健やかな成長を支援するほか、日常的な相談業務を通じた青少年の心のサポートや、周辺地域や企業と連携した青少年の社会参加プログラムにも取り組み、居場所から社会に繋がる拠点をづくりします。

施設名	青少年交流・活動支援スペース
開所年	平成28年4月1日（金）
所在地	〒231-0062 横浜市中区桜木町1-1 びおシティ6F
お問合せ	TEL 045-263-8020 / FAX 045-263-8252
開館時間	9:00~22:00（受付は21:30まで）
休所日	毎月第1日曜日・年末年始
各施設	・フリースペース（交流コーナー、学習コーナー） ・音楽スタジオ ・多目的スタジオ ・ミーティングルーム ・研修室（大・中・小）3部屋

●主な事業展開

① 青少年が交流する機会の提供

青少年が学校や地域、世代を越えた人々と出会い、“交わり”“つながる”きっかけとして「居場所づくり」と交流促進に取り組みます。

② 青少年の体験機会や活動の場の提供

青少年が自分を表現できる場、新しいことにチャレンジできる場をつくりします。

③ 青少年に対する傾聴及び相談

スタッフが一人ひとりの青少年の声に耳を傾け、信頼できる身近な大人として悩みや相談を受け止め、必要に応じた支援に結びつけます。

④ 地域資源を活用した青少年の社会参加プログラムの実施

企業や観光スポットなど地域資源に恵まれた立地を活かして、地域社会に青少年の「出番」をつくりします。

⑤ 青少年と異世代との交流の促進

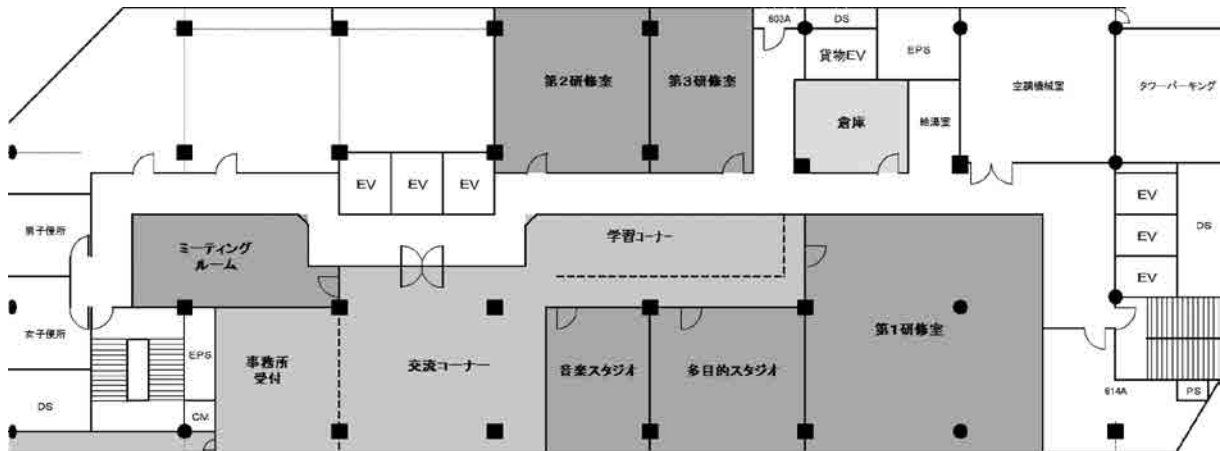
さまざまな世代が出会い、交流する「小さな社会」づくりを目指します。

⑥ その他の青少年支援事業

地域の大人とともに困難を抱える青少年の支援に取り組みます。

青少年の視点を取り入れた多様な広報活動を展開します。

●フロアガイド



●交流コーナー



●学習コーナー



●事務所受付



●第1研修室 定員84人



●第2研修室 定員30人



●第3研修室 定員24人



●ミーティングルーム 定員84人



●音楽スタジオ 定員10人



●多目的スタジオ 定員30人



●交通アクセス

4つの路線からアクセス可能な好立地！

- ・JR京浜東北線・根岸線「桜木町駅」より徒歩3分
- ・市営地下鉄「桜木町駅」より徒歩1分
- ・みなとみらい線「馬車道駅」より徒歩7分
- ・京浜急行「日ノ出町駅」より徒歩10分



周辺Map



第4部 事業報告

野島クリスマスキャンプ 20年のあゆみ

吉田 智之

野島クリスマスキャンプ 20年のあゆみ

公益財団法人よこはまユース施設部
横浜市野島青少年研修センター
吉田 智之

キャンプシーズンの一段落した12月初旬。普段は静かな野島青少年研修センター(以下、研修センター)に、若者たちの手からなる長いアーチが歓声とともに出現する。そのアーチをくぐって姿を見せるのは、研修センターで若者たちと2日間を過ごした子どもたち。照れくさそうであり名残惜しそうでもある子どもたちの表情は、一様に自信に満ちている…。

これは、研修センターで開催される「野島クリスマスキャンプ」の伝統とも言える、参加者見送りでの光景です。

1. 概要

「野島クリスマスキャンプ」(以下、クリスマスキャンプ)とは、横浜市立小学校・中学校個別支援学級に在籍する小学5年生から中学3年生までの児童・生徒を対象とした宿泊体験活動。毎年1泊2日の日程で開催されます。この間、研修センターのある「野島」は、架空の「サンタ島」へと一変。ディナー作りやキャンドルを囲んでのダンス、クラフト制作など、子どもたちは日常あまり体験できないことにチャレンジします。

参加する子どもたちは保護者と同伴。しかし、活動中はボランティアとペアを組み、グループ単位で行動します。そのため、子どもたちとボランティアとは事前に顔合わせの機会(「ふれあいの会」)を持ち、レクリエーションやゲームを通じて交流を深めます。

ボランティアの担い手は、学生を中心とした若者たち。障がい児者との関わりについて知識や経験のそう多くない彼らには、事前の研修を

行い、保護者からも子どもたち個々の性格について教えてもらいます。

特筆すべきは、これらの企画から運営までボランティアが担っている点です。

企画・運営を行うのは、主に小学校個別支援学級の担任を経験した教員たちで構成する「野島クリスマスキャンプ実行委員会」です。

仕事の終わる19時頃に集まり、21時、遅いときは22時頃まで話し合います。内容は、子どもたちに喜んでもらうための工夫や安全面での配慮についてなど。こうした会合を実に半年も前から重ねています。

確かな経験の上にこの綿密な準備があるからこそ、参加者たちは安心して2日間を過ごすことができます。



恒例となった見送りのアーチ

2. 20年のあゆみ

平成8年(1996年)、体験活動を通して障がいのある子どもたちの成長を図ること、青少年ボランティアを育成することを目的に、クリスマスキャンプは始まりました。以来、現在まで20年もの間続いています。この間、延べ700人以上の子どもたち、900人以上のボランティアが参加し、保護者やスタッフを含めると3,000人

近い人たちが関わってきました。

活動を通じて少しずつ変化する子どもたち。
「普段はすぐに泣き言を言うのに、キャンプの間は一言も言わなかった」

「大勢の中に入るのが苦手だったが、人のたくさんいる調理台で野菜を切ってくれた」

保護者たちの言葉から、子どもたちの成長している様子が伺えます。

クリスマスキャンプ20周年は、この小さな成長を紡いできた20年です。開始当時は中学生だった子どもたちも、今では立派な社会人。折にふれて、得意のピアノ演奏やダンスを披露したり、プレゼントを用意してくれたり、頼もしい姿を見せてくれます。

ボランティアの若者たちも、実行委員として準備の段階から参加したり、或いは別のイベントでボランティアとして力を発揮したりと、活躍の場を広げています。

野島クリスマスキャンプ これまでの歩み

平成8年(1996年) (第1回)	・クリスマスキャンプ開始
平成10年(1998年) (第3回)	・小学5年生以上が参加可能に。 ・キャンプのテーマソング「サンタ島のクリスマス」誕生
平成11年(1999年) (第4回)	・見送りの「アーチ」誕生
平成12年(2000年) (第5回)	・参加者とボランティアが理解を深め合う「ふれあいの会」開始
平成17年(2005年) (第10回) ～10周年～	・記念誌の編集・発行
平成22年(2010年) (第15回) ～15周年～	・記念誌の編集・発行、写真展の開催 ・OB・OGも参加
平成23年(2011年) (第16回)	・震災の影響で開催が危ぶまれたが、小規模にて開催 ・野島山への避難訓練開始
平成27年(2015年) (第20回) ～20周年～	・記念誌の編集・発行 ・OB・OGも参加 ・クリスマスキャンドルを演奏とダンスの2本立てで実施

3. 20年間続いた要因

仕事としてではなく、ボランティアの力で続けてきた20年。なぜクリスマスキャンプは20年間も続くことができたのでしょうか。

一つには、依然としてニーズが高いことが挙げられます。

クリスマスキャンプが始まった当時を振り返り、実行委員長の中村一雄さんは次のように述べています。

「障がいのある子どもたちは学校以外なかなか外出できない時代だった」

この状況は現在も大きくは変わっていないようです。保護者からのコメントからもそのことがわかります。

「障がい児の余暇活動を探すのはとても難しく、宿泊を伴うものは特にそうです」

「個別支援学級に在籍している息子にとって、誰に気兼ねすることなく参加できるキャンプは、そうあるものではない」

上記以外でも、「将来的に子どもたちが自立できるように色々な体験をさせたいが、そうした機会が少ない」という声を、今なお多く耳にします。事実、体験機会を求めて、クリスマスキャンプには毎年たくさんの申込みがあります。

参加者にとって安心して楽しめる事業であることも、高いニーズを支えています。

前述したように、実行委員は、キャンプ前日までに何度も検討を重ねます。子どもたちに楽しんでもらいたい、そして安全に過ごしてもらいたいと願うからです。

例えば、子どもと保護者、ボランティアが事前に交流する「ふれあいの会」。これは2000年から始まりました。子どもたちに対する理解を深めることで、子どもたちの心の負担を少しでも軽くし、当日の活動に入りやすいようにとの配慮があります。新たな環境に馴染むことが難しい子どもたちの気持ちを、当日に向けて高める

ための工夫でもあります。

安全面の配慮で言えば、東日本大震災の影響を受けた平成23年(2011年)の事例が挙げられます。

一度は中止も検討されましたが、規模を小さくし、ボランティア役を保護者をお願いすることで子どもたちの期待に応えました。万一に備え、懐中電灯や避難物資の持参もお願いしました。野島山への津波避難訓練を活動に取り入れたのもこの年からです。

また、ノロウイルス感染症が流行した年には、嘔吐への対応を事前に実行委員の間で共有するとともに、参加者全員の手洗いを徹底しました。

実際に嘔吐が発生すると、迅速かつ入念な処置を施したことは言うまでもありません。同時に、他の参加者に対しては状況報告を行い、不安な気持ちの手当てに努めました。

この他にも、20年の間には様々な出来事がありました。その度に細やかな工夫と心配りを凝らして毎年対応してきました。そのことが子どもたち・保護者の安心と共感を呼び、息の長い事業になったのだと考えられます。

子どもたちは勿論、保護者の気持ちをも受け止めてくれる色々な人たちと出会えることも、魅力の一つと言えるでしょう。

保護者の感想には、子どもたちのクリスマスキャンプを楽しく過ごした様子が書き添えられています。

「普段、年下の子と遊ぶことが多いので、中学生の子たちとふれあう事、ボランティアのお兄さん・お姉さんたちとのふれあいが、とても楽しかったようです」

「皆さんにありのままを受け止めてもらった中で、素直に自分を表現していただける時間が、彼にとってとても嬉しく楽しい場であったようです」

学校や家庭以外で他者と関わる機会さえそう多くない子どもたち。クリスマスキャンプは、ボランティアの若者や同級生といった自分に近

い立場の他者に、気持ちを受け入れてもらえる・共感してもらえる数少ない場なのかもしれません。

同様の想いは、保護者にも見られます。

「日頃父親同士が本音を語れる機会が少なく、さびしい思いをしている方が多いので、とても良い機会だと思いました。」

「グループのお母さん方と寝食共にすることで、子どもの将来や学校のことなど色々相談できたり、情報をもらうことができ、楽しく充実した時間を持てて有難かった」

子育ての悩みや相談を共有できる保護者や弱音を受け止めてくれるボランティアのいるクリスマスキャンプは、保護者にとっても気持ちを楽にできる貴重な機会ようです。

子どもたちも保護者も、誰かと交流して心を通わせたい。だから、それが叶うクリスマスキャンプは魅力的であり続けているのだと思います。



子どもとボランティアとのディナーづくり

参加者のニーズが高いからばかりではありません。実行委員それぞれが、クリスマスキャンプに「楽しさ」を見出しているから、長きにわたって活動を継続できているのだと考えます。

では、実行委員にとっての「楽しさ」とは何でしょうか。

ある実行委員は、クリスマスキャンプに継続して参加するようになったきっかけについて、夕食時にたまたま席が隣り合った子どもとの出会いを挙げています。

「身振りや表情などで自分の気持ちを伝えて

くれる姿が嬉しくて、とても楽しい時間でした」

子どもが一生懸命になって、クリスマスキャンプを楽しんでいる気持ちを伝え、その気持ちが自分にも伝わった。短い時間の中でも、子どもと心を通じ合わせることができた。そのことが「楽しい」と感じられたのだと思います。

こうした体験は1回だけではないようです。

この実行委員は上記の言葉に続けて、次のように述べています。

「出会う子どもが増えるほど翌年のクリスマスキャンプへの想が強くなり、今に至ります」

毎年子どもとの出会い・交流が「楽しみ」となり、活動の継続につながっているのです。

この他に、実行委員やボランティアなど仲間との出会い・交流も「楽しい」と感じる要因の一つのようです。別の実行委員が次のように述べています。

「ボランティアを通して知り合った仲間は、キャンプが終わっても交流しています。ここは、たくさんの仲間に出会える素敵な場だと感じています」。

普段行動を共にしない人たちと、時に意見をぶつけ合いながら、一つの目的に向かって活動する。苦労も分かち合うけれど、終わった時の達成感や感動も分かち合う。それによって、仲間意識を強くし、新たなつながりが生まれる。このたくさんの仲間との出会いとつながりに期待して、毎年クリスマスキャンプの場に来るのだと思います。

このように実行委員たちは、「子どもたちに喜んでほしい、子どもたちを楽しませたい」という想いはもちろんのこと、子どもたちやスタッフでの出会い・交流を自分たちが楽しんでもいるから、活動を続けていられるのではないのでしょうか。

以前、長く市民活動に携わり、数多くのボランティアと関わってきた方が、こんなことを話してくれました。

「使命感や問題意識の高い方(ボランティア)は長続きしないことが多かった」

「(ボランティア活動の)動機は‘不純’な方が良い」

支援する・支援されるという関わりでは、活動が一方的になり、自分の思うような反応が返ってこない場合に相手や活動に不満を抱きやすくなる、ということのようです。

実行委員は、使命感や問題意識を持ちつつも、別に楽しみを見出しています。そして、子どもたちと一緒に活動を楽しんでいます。

だから、クリスマスキャンプは20年間も続くのでしょう。



キャンプのハイライト、クリスマスキャンドル

青少年育成活動・支援活動 研究報告・事例集

YOKOHAMA EYE'S 2015

平成28年 3 月

■編集委員

尾崎万里奈 七澤淳子 平野嘉昭 細井惟子

※執筆者の所属はすべて平成28年(2016年) 2月28日現在のものです。